始

皇華隨班錄

11
303

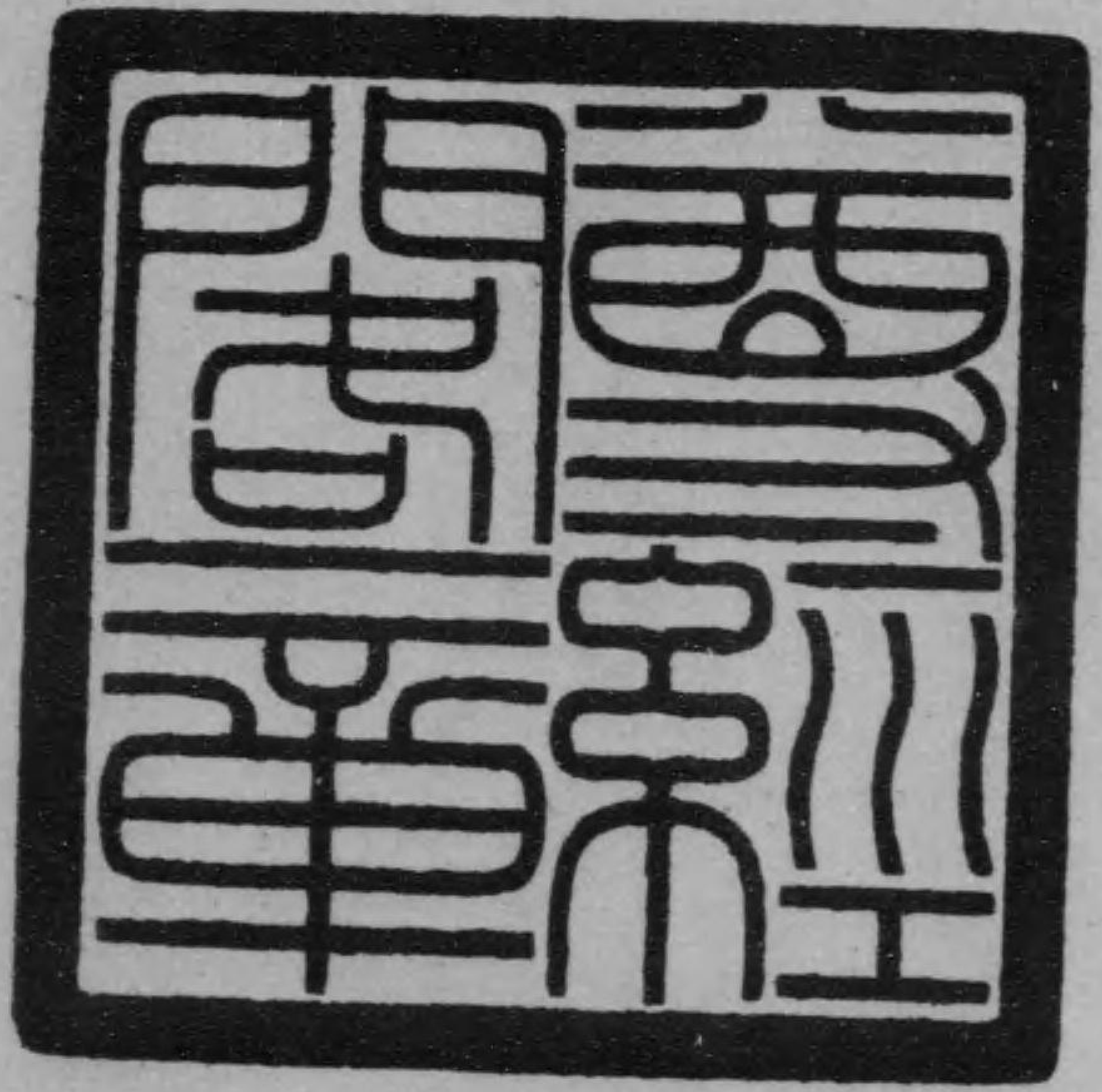
11-303

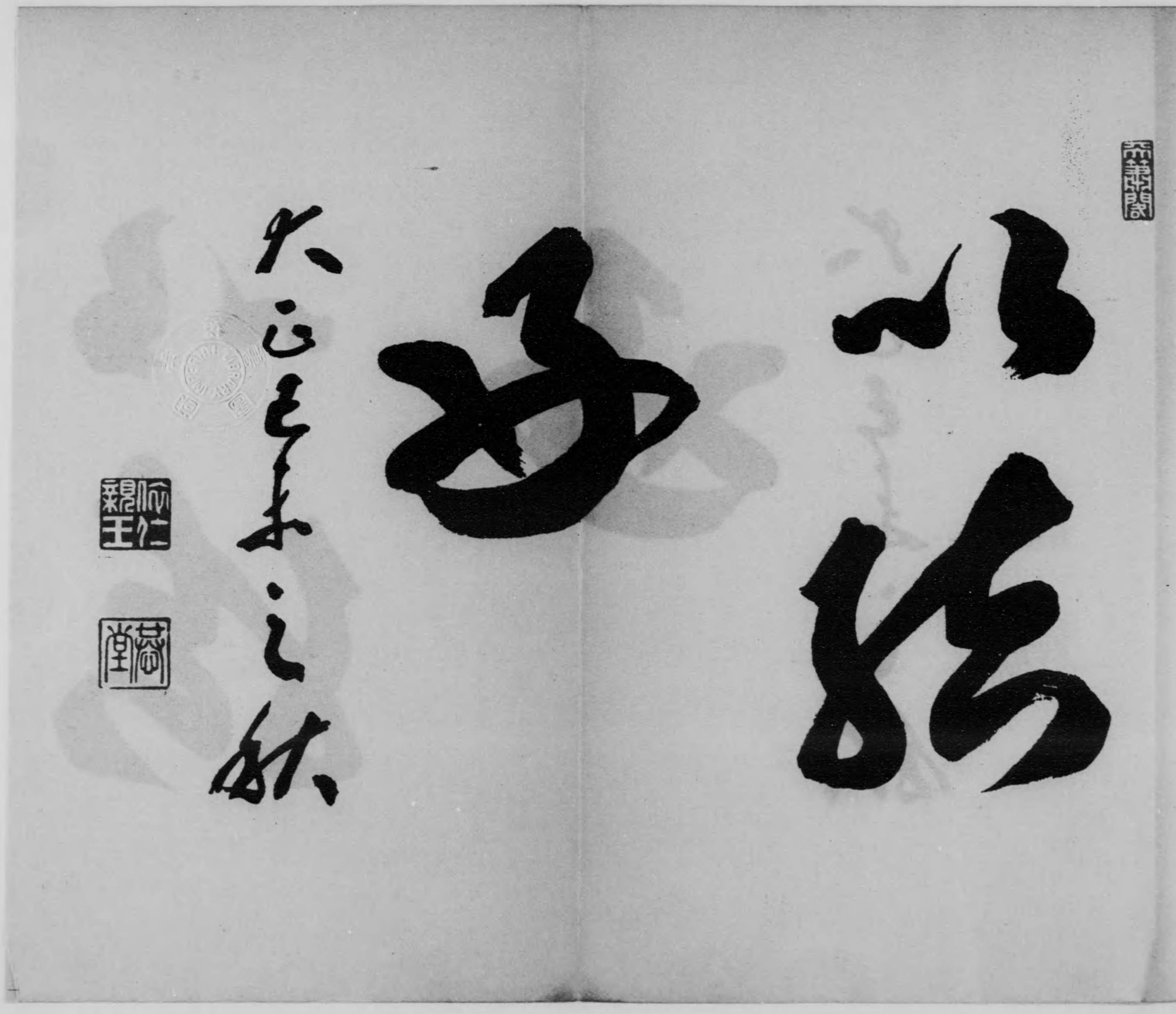
帝國圖書館藏

皇粤須班録

寄贈本

大正
8. 12. 22
寄贈




大正五年之秋
依仁親王

前田侯此に英
國に於て私費の分
寮生一同の為
特に若干金を賜は
大備[illegible]表寺閣
義をあつ世れ
中経[illegible]
志は[illegible]
[illegible]

叙

世事恍然如夢幻、如泡影、人處其中、如轆轤、如走馬鐙、如機械之旋轉不止。而自達人觀之、則其徐而緩、如雲煙之過眼、其疾而急、如擊石之發火、閃電之放光乎、乃記而傳之、

亦猶如鴻爪之印雪泥耳、一部皇華隨班錄、宜作如是觀以繙之也、

大正八年八月

侯爵前田利爲識

旨之一再修正印刷ニ付シ候多

拜啓倍御康勝奉賀候陳者
御承知ノ通客歳九月欧洲大戦
猶酣ナルニ際シ　東伏見宮殿下
勅ヲ奉シテ欧洲ニ赴キ元帥刀ヲ
英國皇帝ニ捧呈轉シテ佛白
伊米各國御歴訪本年一月
御帰朝アラセラレ候當時利為亦
恩命ヲ拝シ扈従シ上途以来
日録ヲ作リ候者屡然冊ヲ為シ
候其儘打捨テ候モ聊鶏肋ノ感
有之ニ再修正印刷ニ付シ候多
クハ皮相ノ觀察ニ候得共　台航ノ
一斑御推知ノ一助トモ可相成歟ト
存シ一部進呈仕候御一讀ノ栄ヲ
得ハ欣幸ノ至ニ候　敬具

伊米各國御歴訪本年一月
御帰朝アラセラレ候當時利為亦
恩命ヲ拝シ扈従シ上途以来
日録ヲ作リ候者歴然冊ヲ為シ
候其儘打捨テ候モ聊鶏肋ノ感
有之一再修正印刷ニ付シ候多
クハ皮相ノ観察ニ候得共台航ノ
一斑御推知ノ一助トモ可相成歟ト
存シ一部進呈仕候御一讀ノ栄ヲ
得ハ欣幸ノ至ニ候　敬具

大正八年十二月

侯爵前田利為

皇華随班録

目次

寵任拜命……一頁
横濱解纜……四
太平洋程……六
ヴィクトリヤ投描……九
ハロー航行……一二
ロッキー越嶺……一四
バァンフ探勝……一六
ジョージ、レーン氏牧場……一九
平原游獵……二一

牧場巡覽……二三
曠原東行……二五
ニッケル礦坑……二八
ナイアガラ觀瀑……三〇
オタワ逗留……三六
クェベック都城……三九
ハリファックス到港……四三
オルヴィエト號坐乘……四四
太西洋程……四六
英國登陸……五一
元帥號捧呈……六〇
倫敦淹留（其一）……六七

倫敦淹留（其二）……七一
倫敦淹留（其三）……七九
倫敦淹留（其四）……八三
倫敦淹留（其五）……八八
蘇格蘭觀艦（其一）……九五
蘇格蘭觀艦（其二）……一〇五
英佛海峽航過……一一一
巴里淹留……一一三
戰線巡檢（其一）……一一五
戰線巡檢（其二）……一二二
巴里再留……一二九
白國王行宮……一三三

英軍戰迹……一四二
巴里市民祝頌……一五一
伊國行程……一五六
伊王謁見……一五八
伊國淹留……一六四
歸佛車中……一六九
佛國告別……一七一
倫敦再留……一七四
太西洋歸航……一八二
米國上陸……一八四
華盛頓淹留……一八七
華翁村莊……一九四

大陸驅車……一九八
グランド、カニオン探險……二〇一
加州沃土（其一）……二〇八
加州沃土（其二）……二一二
加州沃土（其三）……二一五
加州沃土（其四）……二一九
桑港解纜……二二四
布哇寄港……二二六
錦帆歸朝……二二八

挿畫目次

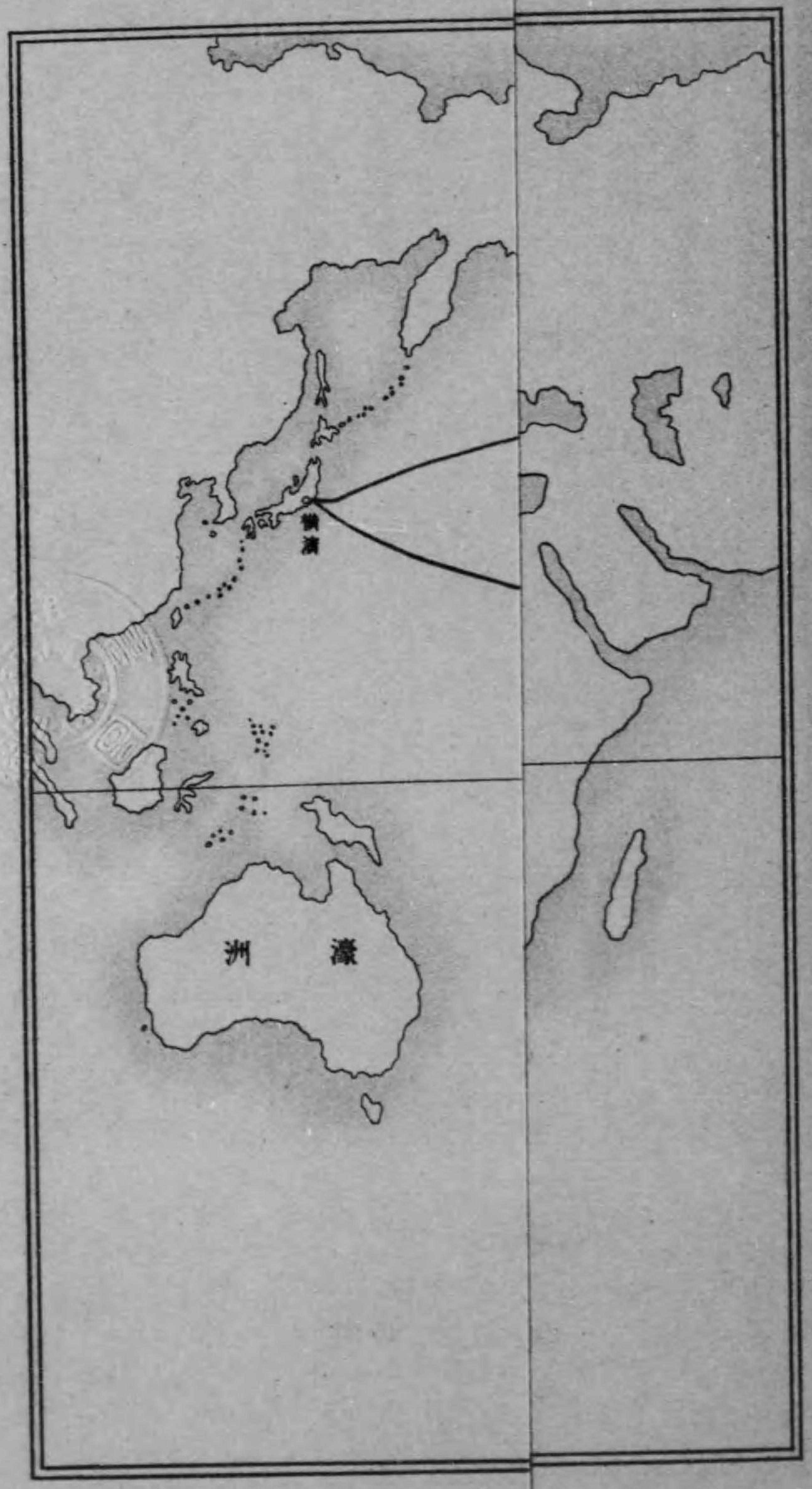
台航路程要圖……口繪
元帥號捧呈後記念撮影……口繪

横濱解纜……四
鵬程萬里……七
加奈太横斷列車……一四
獵々たる山風……一六—一七
良駿愛撫……二三
瀑脚俯瞰……三二、三三
オタワ都城……三八—三九
オルヴィエト甲板上……四七
危險海上の警備……五〇
コンノート殿下台迎……五三
英京バッキンガム王宮……五七
元師號捧呈式場班列……六二—六三
大饗席次……七二—七三
ビギンヒル飛行場台臨……八五

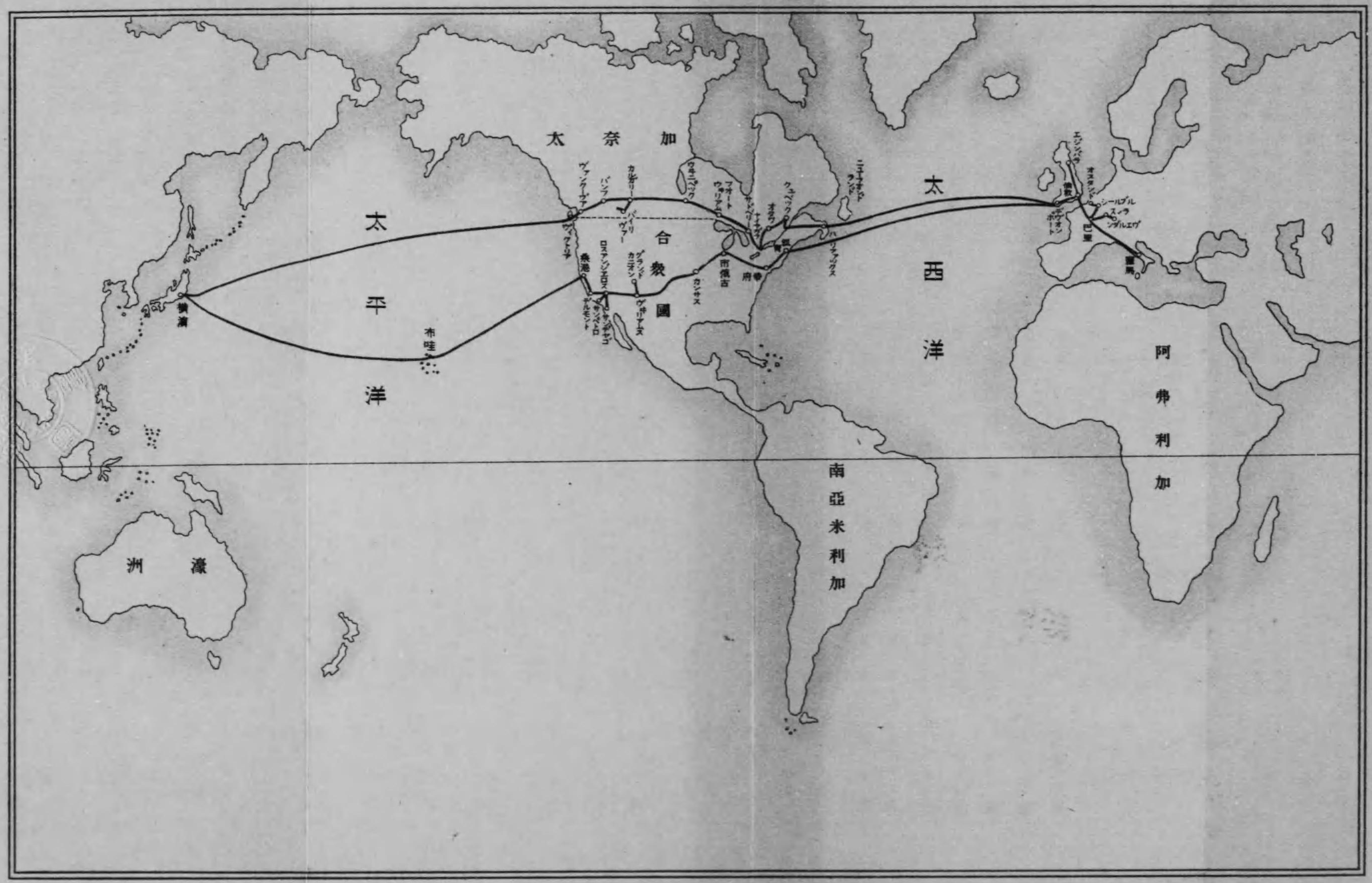
ギルドホール歡迎式典……九〇—九一
ビーティー提督旗艦上……九六
英國聯合艦隊司令官ビーティー提督の手蹟……一〇四—一〇五
奇艦アーガス……一〇八
佛國ウェルダン、スーブィール殘壘上……一二六—一二七
ウェルダン、フレーリー村の蕪沒……一二六—一二七
巴里の戰捷氣味……一三〇—一三一
彈痕地帶……一三四—一三五
ループルージ近郊白國皇室御候問……一三八—一三九
遺棄せる獨軍の鐵盔……一四四
英國第五軍司令官ローリンソン將軍の手蹟……一四八
英軍總司令部台臨……一五〇—一五一
凱歌……一五二—一五三
伊王宮殿……一六〇、一六一

伊國總司令官ディアッ將軍の手蹟……一六七
ハイドパークの晩秋……一七五
太西洋の風浪……一八二—一八三
華翁記念尖塔……一八九
米國藏相マッカドウ氏の手蹟……一九二
コルコラン繪畫館を飾る英艦ウィンディクティヴの雄姿……一九六—一九七
巉崖屹立三千尺……二〇四—二〇五
峽谷探險……二〇四—二〇五
深峽底……二〇六—二〇七
ロスアンジエルス市街頭……二一〇
ホテルデルモント……二二二—二二三
老松危巖……二二二—二二三
桑港投錨……二二四
狂瀾舷に摧く……二二四—二二五

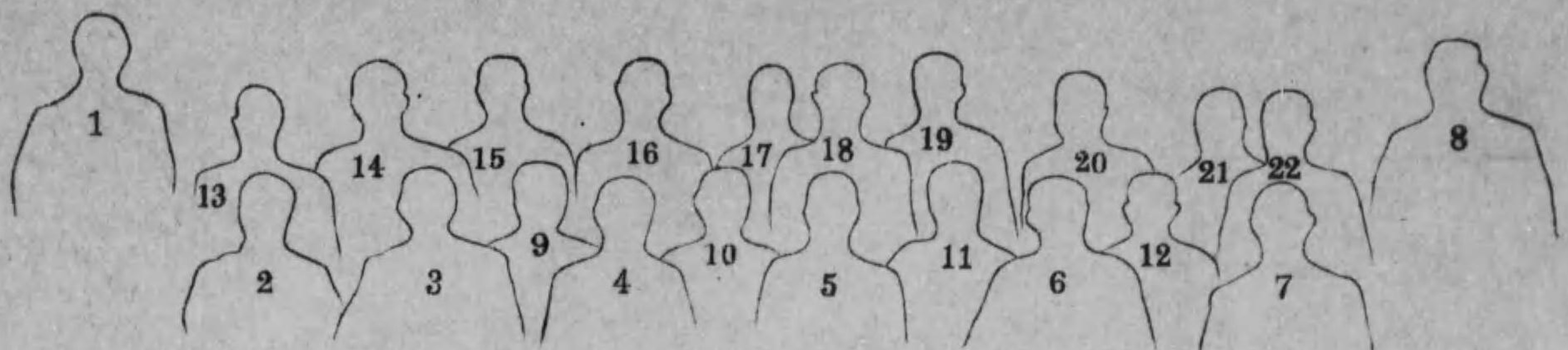
錦帆故港を飾る……二三〇—二三一
殿下御上陸……二三〇—二三一


横濱
濠洲

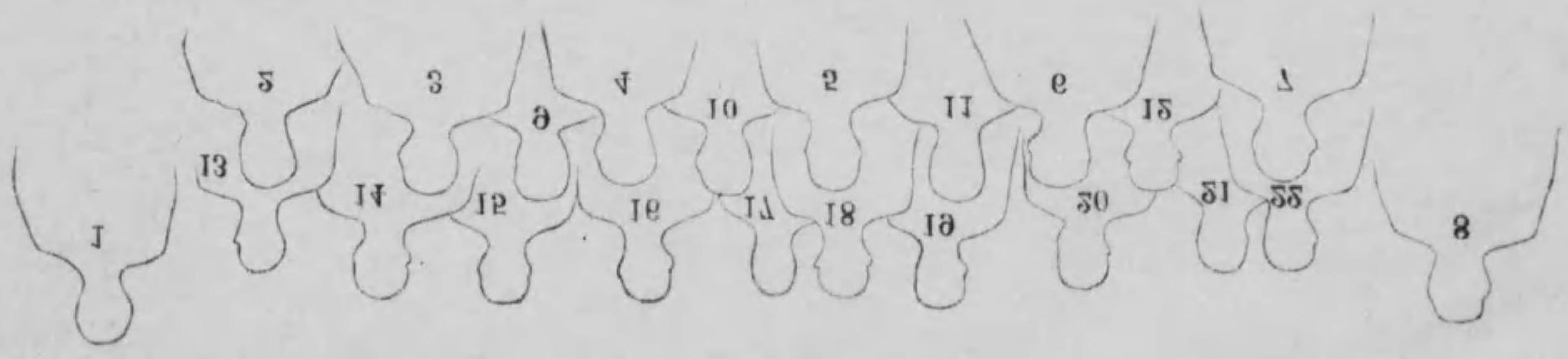
台航路程要圖



元帥號捧呈後記念撮影



1. ペンブローク伯爵
2. 前田侯爵
3. パルトニー中將
4. 珍田大使
5. 東伏見宮殿下
6. コンノート殿下
7. 井上侯爵
8. サー、チヤールス、カスト侍從
9. 飯田少將
10. 柴中將
11. 小栗中將
12. 南鄉大佐
13. 高橋宮內事務官
14. 山縣少佐
15. 松平子爵
16. 矢田二等書記官
17. シンクレーヤ大尉
18 田中少將
19. ヒル少佐
20. 吉田一等書記官
21. 林二等書記官
22. 雨宮軍醫大監



皇華隨班錄

侯爵　前田利爲著

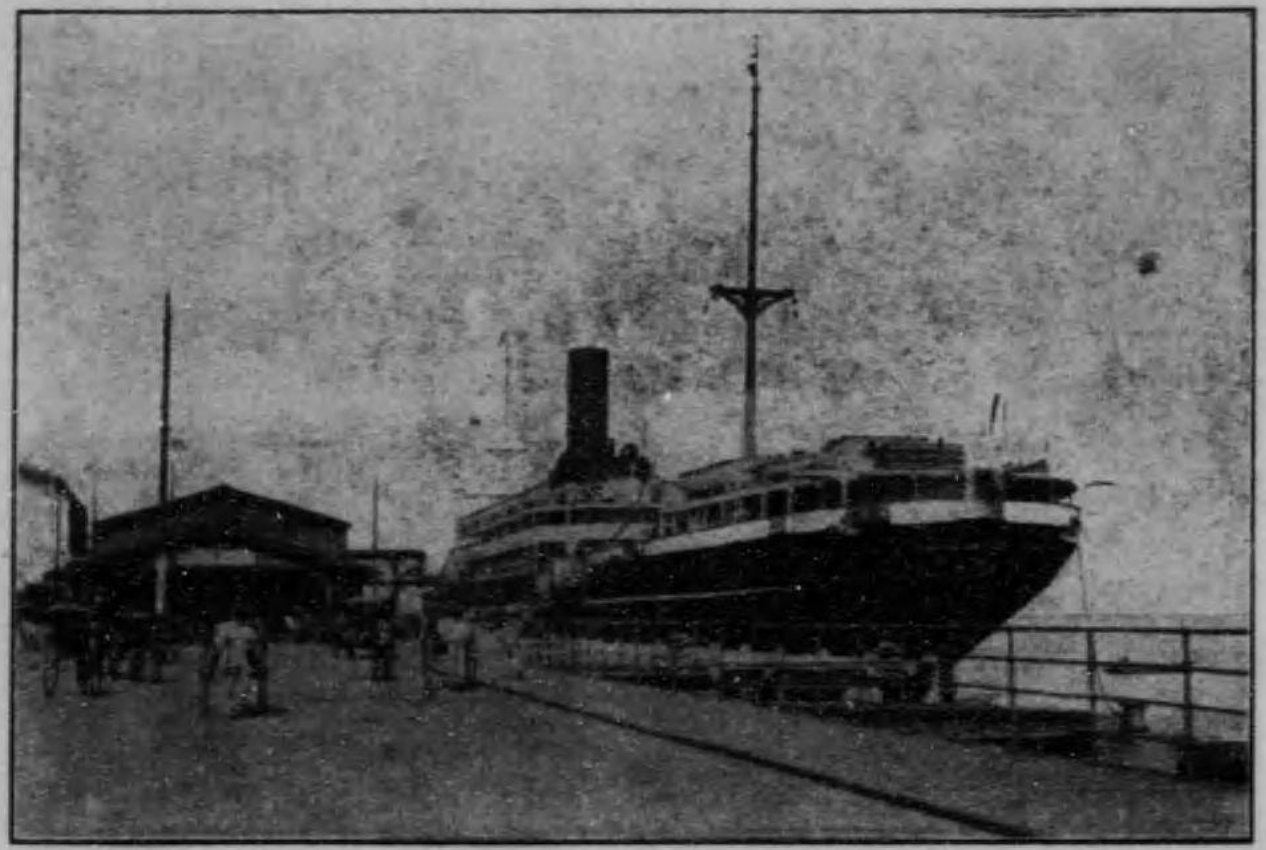
寵任拜命

大正三年秋。大亂歐洲に興起し。獨墺諸國と英佛諸國と。干戈相見え。各、數百千萬の軍を出し。以て勝敗輸贏を爭ひ。五たひ年を閲て猶ほ未た決せす。洵に振古未有の禍變と爲す。我叡聖文武なる天皇陛下。日英同盟の誼を重し。亦軍を出し以て英佛を援けたまふ。七年春。獨逸は英佛聯合軍に對し。一擧以て雌雄を決せんと欲し。國力を竭くし。戎馬を悉くし。震天駭地の一大快戰を爲す。聯合軍亦應戰甚た力め。勢太た危急なり。

是時に當り。我　天皇陛下英國皇帝陛下互に其國最高の官銜元帥を貽り。以て盟を尋め交を溫めたまふ。是に於て。英國の王族アーサー、オブ、コンノート殿下我帝國に來り。元帥節杖を我　陛下に拜捧したまひ。我　陛下も亦依仁親王殿下東伏見宮に詔して。我元帥刀を奉して英國に之き。以て之を親捧せしめたまふ。

六月二十四日。宗秩寮總裁侯爵井上勝之助、第十二師團長陸軍中將柴五郎、吳海軍工廠長海軍中將小栗孝三郎、侍從兼式部官子爵松平慶民、第二艦隊軍醫長海軍軍醫大監雨宮量七郎、皇族附武官海軍大佐南鄕次郎、宮內事務官高橋暐、海軍軍令部出仕兼參謀海軍少佐山縣武夫、參謀本部部員兼陸軍大學校兵學教官陸軍步兵大尉侯爵前田利爲に勅して。親王に扈從せしめたまふ。

時に戰正に酣なるを以て。一切幽閟して。官報及新聞に記載すること勿らしむ。乃ち九月下旬を定めて上途の期と爲し。路を太平洋に取り。米大陸を歷て之に赴かんとし。親王及各員密に治裝して。行李を準備す。



横濱解纜

横濱解纜

九月二十六日。晴。午後三時汽船伏見丸（載量一萬一千噸）に乘し。横濱を發し。征途に上る。

是日金天高く澄み。玲瓏として碧玉の如く。滄海波穩かにして。彷彿として紺席に似たり。以て豫め一路の平安なるをトすへし。

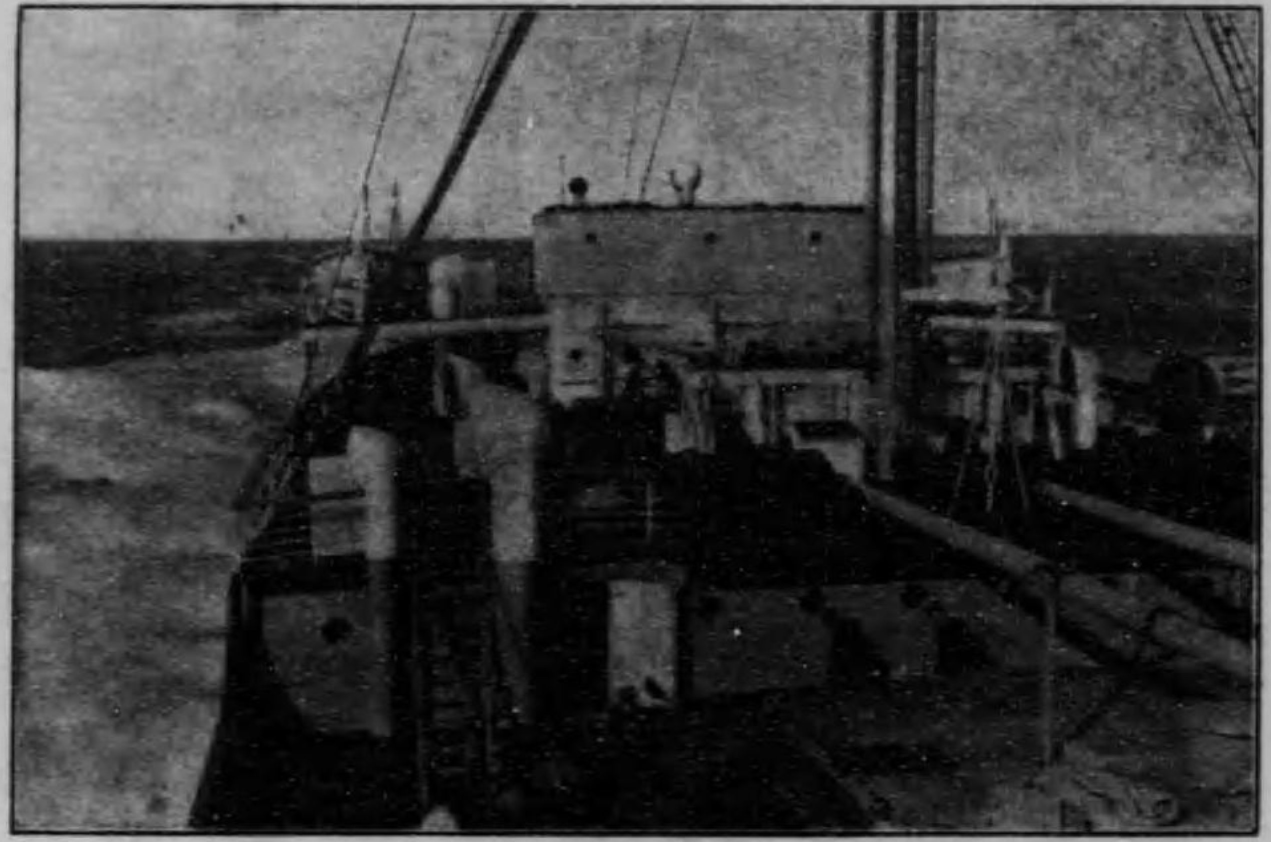
既に灣外に出て停泊して親王の來りて乘したまふを待つ。蓋し各各任意に乘船して事の漏泄するを防かんとするなり。

親王至りたまふに迨ひて。拔錨して灣を出つ。船は則ち空しく一抹の烟を波上に搖曳して。徐ろに太平洋に向ふ。回顧すれは東京灣は靉靆として。暮靄夕嵐の爲めに罩められ。頃刻にして其形を水烟淼茫の中に沒す。

太平洋程

米大陸の横濱を距ること四千二百海里にして。船の行くこと毎時大約十四海里。航行の日子十有八。此間毎日午前八時起蓐喇叭を吹き。以て船客を警す。乃ち起蓐して盥漱し。九時三十分朝餐し。朝餐畢れは則ち或は運動を爲し。或は書册を繙き。午後零時三十分中飯し。後運動及讀書すること。猶ほ午前の如し。七時晩膳に就く。船客概ね此を以て常と爲す。

十月閏二日（太平洋を東航するや。途中一閏日を設けされは。暦日と符合せす。）及三日。余親王の台旨を奉し。歐洲戰局推遷の事項を進講す。四日。是日航程三百五十四海里。迅駛此の如きは。横濱拔錨以來。此を始とす。五日。山縣少佐亦帝國海軍戰時行動に關する事項を進講す。七日。船明日將に加奈太ヴィクトリア港に達せんとす。晩餐の席上。井上侯爵衆に代



鵬程萬里

りて。船長及船職各員に對し。水路平安犒勞の辭を述へ。以て謝意を表す。

又航海中台旨を奉し。各員輪遞して。毎日二人親王の晩膳に陪す。

船上時時無線電信を以て世事の移易するを聽く。其事の較ゝ大なる者を擧くれは。曰く我政友會內閣の成立。西伯利亞露國政府の創立。ホルワット極東太守の就任。サロニカ軍の勝利。勃國の休戰提議。聯合國の條答。土軍シリヤの敗衂。英軍敵を擒すること二萬。佛國北境聯合軍の大捷。敵を

擒すること一萬五千。砲を獲ること三百五十門等是なり。

航海中。天宇率ね靜恬和寧。解纜第三日以降。寒氣漸く加し。人皆隆冬の服を服せり。

ヴィクトリヤ投錨

八日。黎明。船ヴィクトリヤ港外に投錨す。時正に午前六時。出日杲杲として。東山の上に升り。紅光海を射。水金色を呈して。閃爍動盪し。眼界豁然。猝に夢境を出てしか如し。

既にして檢疫畢り。我浮田ヴァンクゥヴァー領事郷次來り迎へ。周旋頗る務む。九時船埠頭に達す。加奈太政府接伴員サー、ジョセフ、ポープ等便服來り迎ふ。握手一揖し。親王以下自動車數輛を連ね。熇熇の秋陽を穿ち。井井の街衢を駛せ。「ホテル、エンプレス」に投す。ホテルは鐵柱石桁にして。宏敞崢嶸。港に瀕して天半に聳え。重樓層閣。山葛之を纏ひ。葉葉秋を經て。殷紅特に鮮なり。既にして親王賓客に接したまひ。余等壯者は。街衢を散策し。畫圖書籍及百爾の旅具を購ふ。山縣少佐は往年乘艦して屢此に來れりと云ふ。

近午。親王以下自動車に駕し。沿海の通衢に出て。パブリック公園、ヴィクトリヤ郊球場（ゴルフ）を經て。アップランド公園に至る。園は方各。數哩。處所に別墅あり。柏樹林を成し。秋に値ひて絳を染め。落葉草に依り。野花散布し。淡紅淺碧。佳致掬すへし。附近土地磽确にして。林木に適せさるか如し。然るに樹を栽え路を作り。圃を設け草を生せしめ。瘠土を變して沃壤と爲し。枯壤を化して膏土と爲す。白人の努力。洵に敬服すへし。

歸路加奈太民兵の屯營を觀る。指揮官中佐某余等を迎へ。款接して曰く。營兵半大隊あり。不日其一部を析ちて。之を東亞に遣はさんとす。之か爲め頗る多事なり。又感冒の流行するを防くか爲め。警戒注意すること懈らすと。

晌午ホテルに還る。州知事サー、フランク、バァナード等來りて。親王を拜問す。午後一時。井上侯爵以下親王に陪して午餐す。サー、ジョセフ等接伴員も亦之に列す。二時十五分輕舸に乘して。ヴィクトリヤを發し。ヴァンクゥヴァーに赴く。

ハロー航行

是日天候晴妍にして。眺矚頗る佳なり。寫眞機を手にし。甲板を逍遙する者鮮からす。本船は主として風色を覽觀するものに係り。多く賓室を設けたり。接伴員は特に一行の爲めに席を前甲板に設く。親王も亦甲板に立ち。サー、ジョセフの指示を以て。風景を台覽したまふ。サー、ジョセフは訢訢として說く。往年ハロー海峽國境の事に關し。加奈太米國爭論相下らす。竟に獨逸老帝を煩はし之を調停せりと。老帝は本と加奈太を佐助せし人たり。而して今や則ち加奈太も亦獨逸の敵と爲る。時勢の推遷する眞に測る可らさる者あり。

既にしてハロー海峽を經て。迂曲してヴァンクゥヴァー島を過き。ヴァンクゥヴァーに抵る。其間大約七十海里。風恬に波穩に。乾坤一碧。白鷗羣を爲して。船の兩舷を掠め。遙に山嶽の白皚皚として。天の一方に聳ゆるを觀る。斯風斯景。屢〻寫眞機の包絡する所と爲る。夕靄ロッキーの羣巒を掩ひ。燈光ヴァンクゥヴァーの市街を燭らすに比ひ。船徐ろに埠頭に近つく。時正に七時なり。

ヴァンクゥヴァーは加奈太西岸要衝の地に係り。坊市闤闠にして整ひ。交通蕃昌にして便なり。人口十五萬六千あり。ホテル、ヴァンクゥヴァーに小憩す。亦壯亦麗にして。巍然として市の中央に屹立す。八時晚餐す。加奈太政府陸軍、內務、大藏の三大臣。偶〻此地に逗留す。亦我晚餐の席に列せり。

十一時發軔。加奈太太平洋鐵道に賴り東行す。親王以下の列車は。特に設備せしものに係り。雅潔にして清快なり。サー、ジョセフ及ヘンダーソン中佐等同乘して。凡百の接伴を爲す。

ロッキー越嶺

九日。汽車漸くロッキーの山蹊に入る。午にして人の喚起する所と爲り。食堂に如く。車丁窓外の山川を指示して曰く。將にカムブルース驛に近つかんとすと。

ロッキー山は。カスケード、ゴルド、セルキルク、ロッキーの四大山系走集して來り。一大喬嶽を成し。湖瀑其間に介し。風光凄絶。特にセルキルク、ロッキー二山系の如きは。雪嶺氷嶽。天を摩し空を衝き。老樹古木。鬱森黝藹

加奈太横斷列車

たり。

本鐵道の大陸を横斷貫串せしは。西暦一千八百八十五年とす。自來經營頓に進み。規畫碩大を加ふ。今其崖略を統計すれは。鐵軌の延長一萬八千五百哩。鐵道連絡船舶四十萬噸。灌漑地七十萬町歩。森林地區一千平方哩。而してロッキー山間の路程。五百餘哩に達す。此間山嶽の崇高。一萬一千呎を出る者四十八。亦以て大陸の雄俊閎廓なるを知るへし。

夫れ山間鐵軌の路程五百哩あり。一日の能く經過すへきに非す。晡時窓を開きて景を觀れば。ゴルド、セルキルク兩山を歴て。將にロッキー山徑に迫らんとし。而して暮色既に蒼然たり。故に纔にシカモース湖畔の風光。レヴェルストーク峻嶽の暮雲。カニオン谿谷の清幽等を探るを得しのみ。他は山靈之を鎖して示さす。

露光量違いの為重複撮影

巍々たる山嶽

バンフ探勝

十日。夙興して窓を開けは。旭光照射し。四近の峻嶽奇峰。白雲の掩ふ所と爲り。精神頗る爽快なり。蓋し汽車ロッキーを越へ。黎明バンフに抵り停留せるものなり。バンフは。ルウィス湖と偕にロッキー勝區の一に屬す。

九時縕袍を衣。寫眞機を携へ。自動車を連ねて。バンフ探勝の途に上る。坦路を馳せて。ホテル、バンフに至る。ホテルは。加奈太太平洋鐵道會社の經營するものに係る。深谿に俯し。高嶽を背にし。客室四百餘。食堂、舞踏室、游泳場、土耳古浴漕等。悉く備はりて畢く大ならさるはなし。規模の弘麗にして。設備の整齊なる。亦驚くへし。蓋し孟夏陶陶の候此に來遊すれは。啻に雪嶺、氷嶽、森林、清溪の目を悅はすのみならす。山行、漁獵、游泳、騎馬、漕艇、郊球等。一として

露光量違いの為重複撮影

巍々たる山風

バァンフ探勝

十日。夙興して窓を開けは。旭光照射し。四近の峻嶽奇峰。白雲の掩ふ所と爲り。精神頗る爽快なり。蓋し汽車ロッキーを越へ。黎明バァンフに抵り停留せるものなり。バァンフは。ルウィス湖と偕にロッキー勝區の一に屬す。

九時縕袍を衣。寫眞機を携へ。自動車を連ねて。バァンフ探勝の途に上る。坦路を馳せて。ホテル、バァンフに至る。ホテルは。加奈太太平洋鐵道會社の經營するものに係る。深谿に俯し。高嶽を背にし。客室四百餘。食堂、舞踏室、游泳場、土耳古浴漕等。悉く備はりて畢く大ならさるはなし。規模の弘麗にして。設備の整齊なる。亦驚くへし。蓋し孟夏陶陶の候。此に來遊すれは。啻に雪巒、氷嶽、綠林、清溪の目を悅はすのみならす。山行、漁獵、游泳、騎馬、漕艇、郊球等。一として

客思を慰めさるものなからん。眞に佳境と謂ふへし。而して白人の歳時行樂已まさるの趣。亦緬想すへきなり。

旅館を觀。郊球場を過き。ケーブ、エンド、ベースンに到り。硫黄浴堂を覽る。台旨あり。松平、南鄕、山縣三氏と倶に入浴游泳す。浴槽廣大鮮麗にして。一浴乃ち神氣の寛綽なるを覺ゆ。

博物館、動物園を過く。博物館には。主としてロッキー山の動植諸標本を臚列し。動物園には。附近獲る所の珍禽奇獸を飼育せり。余幼時嘗て英書を繙きしに。溪狸（ビーヴァー）の樹木を咬斷するを錄せり。今之を面見し。始めて其狀を知る。バファロー公園を歴て。犛牛（バファロー）の悠然として平野に佇立し。麋鹿の馳突して崖嶗を飛跳するを目す。既にして列車に歸る。

午後二時發軔し。ボー河に沿ひ。峰巒環列の間を駛す。地勢隨ひて

駛すれば隨ひて低下し。遂に邱陵と爲り。曠野と爲り。滿目寥廓。知る吾人は加奈太曠原馳騖の人と爲りたるを。而して一たひ首を回せば。ロッキーの峻嶽奇峰は。冉冉として形を暮雲杳渺の中に隱せり。

晡時カルガリーに抵る。カルガリーは。卽ちアルバータ州南方沃野の曠原市（プレーリー、タウン）とす。人口八萬餘あり。邦人數名寓す。坊市に電車あり。亦殷賑と爲す。停車三十分。乃ち寫眞機を携へ出て丶風俗を觀る。既にして乘車南駛して。ハイ、リヴァー村に到る。亦耕農牧畜を以て生産豐饒なりと云ふ。

ジョージ、レーン氏牧場

ハイ、リヴァーより郊坰を迂曲して。二十四哩を距り。一大牧場あり。廣袤二萬町步。原野起伏聯緜せり。佛國產馬パチェロン種を養飼し。酸辛經營すること。此に數十年。目今パチェロン、サルフレット種の良馬六百餘頭を有せり。是れをジョージ、レーン氏の牧場とし。加奈太諸牧場に白眉たり。故に親王台覽したまはんとし。レーン氏來り迎ふ。

是より先き。談偶〻遊獵に及ぶ。加奈太接待員ヘンダーソン中佐頻りに之を慫慂す。松平氏及余意に謂へらく。レーン氏の牧場に遊獵するも。亦旅中の一興なりと。而して之を爲さんとするには。今夕牧場に赴かさるへからすと。乃ち胥謀りて衆に拔き。レーン氏の嚮導を以て自動車に乘し。ロッキー山風に抗して發す。徑路凹

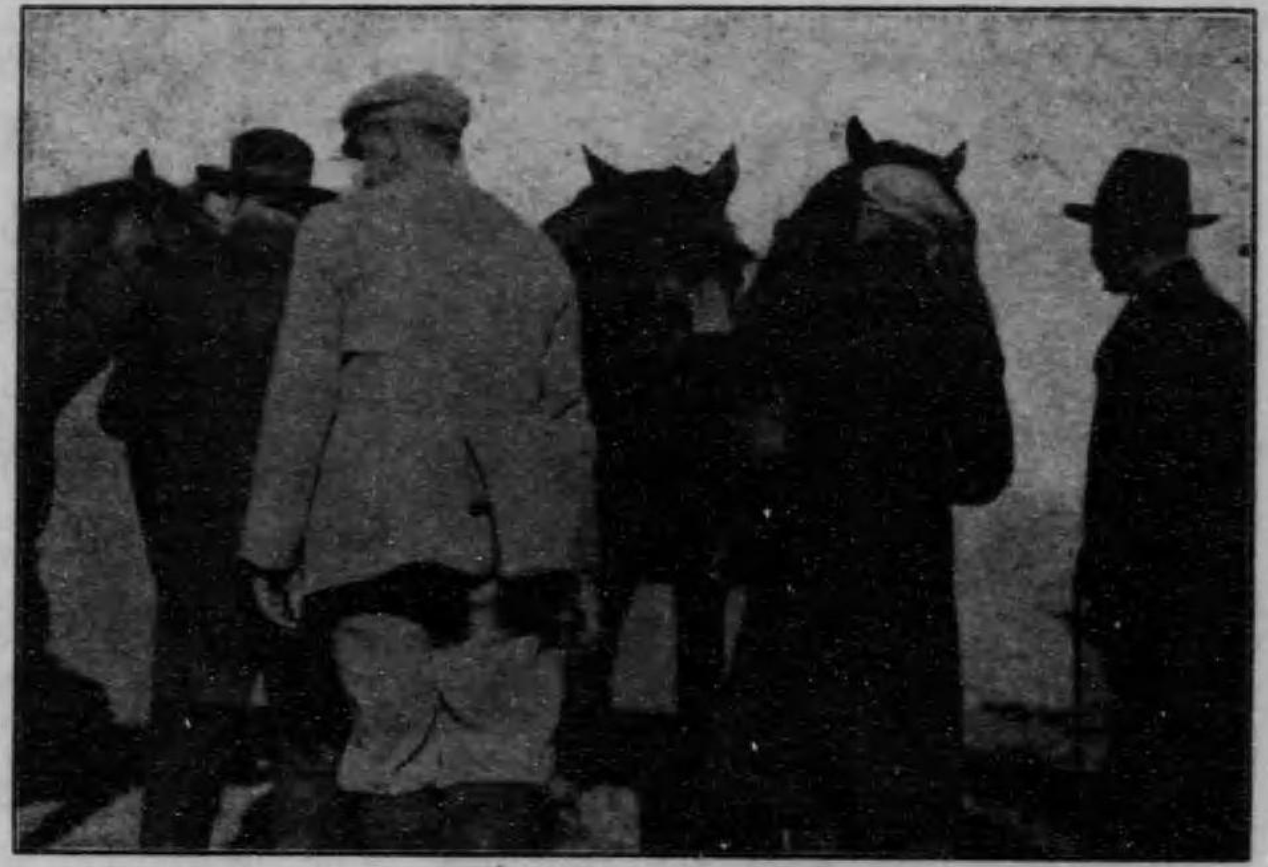
凸にして。車行鴉軋たり。駛すること二十餘哩。日暮れ途遠く、風寒く草偃し。語談も亦絶ゆ。九時始めて牧場に達し。茅舍に入る。レーン氏は質野の老翁たり。粗服を服し。儀容を修めす。甚た意を世事に經すして。牧畜を以て終焉の業と爲すか如し。世に謂ふ。英人の容貌言語。頗る貨殖に淡なるか如し。而して其實必すしも然らすと。蓋し翁も亦其一人ならん。其茅舍は留宿するを以て足れりと爲し。毫も裝飾せす。唯室隅に金銀綬章を臚列するを見る。是れ皆其業を表彰せられし者なり。既にして晩餐の桌に就き。レーン氏の俗譚平話を聽き。麥酒を斟む。庖丁に一支那人あり。是れ亦旅中の一奇事たり。餐畢り。賓室に入り閑談す。ヘンダーソン中佐レーン氏と談自由貿易の利害得失に及ひ。迭に娓娓討論して屈せす。粗野の牧翁と都雅の武官と。對し得て其趣頗る妙たり。

平原游獵

十一日昧爽。人の爲めに扉を敲かれて蹶起し。室を出てゝ晨餔し。銃を手にし舍を出つれは。朝暾東方の高原に升らんとし。天涯紅を潮し。燔くか如く燃るか如く。舍後の林木。日光に照されて。葉葉黄金の色を呈せり。既にして自動車に上り。赴きて獵す。會、場員獵犬を牽き至る。乃ち之を車上に載せ。以て馳す、行行野鳧數翼路傍の沼中に浮汎するを覩るも。之を狙擊せす。徑ちに牧場に踵りて。徐行緩走し。遂に停車し。三人銃を手にし。相隔りて齊しく進む。

乍にして一野禽の將に鼓翼して飛はんとするあり。時に銃聲驍然として耳に徹し。聲に應して飛翻墜下し。野禽は竟にヘンダーソン中佐の爲めに獲らる。是に於て犬驁せ人追ひ。草を蹂み荆を

踐み。銃聲洊りに響き。禽を獲ること通計五翼。禽はプレリー、チッキンと稱し。野鷄の一種に屬す。鶉に肖て鷄大のものとす。余も亦飛沖するものを射撃し。幸に一翼を獲たり。余始めて手銃游獵し。而して特に飛沖するものを獲。接伴員の爲めに賀問嗟賞せらる。



良駿愛撫

牧場巡覽

是日近午。親王隨員を從へ至りたまふ。余等原頭に拜迎し。亦扈從して自動車に駕し。牧場を巡覽す。豕羣より始めて馬羣に及ふ。馬は大抵パチニロン種の筋骨堅勁にして。皮毛潤澤なるものに係れり。數十百頭羣を爲し。彼に屯し此に秣す。更にパチニロン種の秀逸なるものを觀る。其巨大なるものを簡ひて重量を衡れは。二百四十貫に過きたり。

舍に卽き午餐し。進みて牛羣を觀る。

徑路高低し。時に溪流あり。車を其間に駛すること。疾速迅捷。猶ほ馬を驅るか如し。是も亦一奇と爲す。

歸路アメリカ、インディアン男女の騎馬羣を成して來るに値ふ。其獵犬を從へ。健馬に騎し。異服を衣。奇語を吐き。秋林丹黄の間を過くるの狀。眞に一幅淺絳の畫を觀るか如し。試みに寫眞機を以て之を迎ふれは。女子は則ち嘻嘻一聲。面を反け鞭を揚けて去る。」午下三時此を去り。駛せてハイリヴァーに抵り。汽車に轉し發軔す。時殆んと五時。北行カルガリーに踵りて。更に本線に遷り。東向して漠漠の曠野を走る。

曠原東行

十二日。ムース、ジャゥ附近に到り天明く。盡日奇なく異なく。殷殷轔轔として。茫茫の曠原。渺渺の平野を經過し。ウィニペッグに及へは則ち既に日晡なり。其間處所に放牧の牛馬羣を成すあり。收禾の山積して塔を作すあり。鐵軌を野に布き。穀粟を運搬するあり。喞筒に機を設け。麰麥を呑吐積卸するあり。謂はゆる大農の作業に係り。其狀洵に偉觀なり。

ウィニペッグは。マニトバ州の首府にして。人口二萬五千に過きす。而して高樓傑閣接比し。宛も一大都府の面目を爲す。

十三日。オンタリオ州に入る。シュウペリオル湖に近つくに垂んとし。曠原は漸く林莽に變し。既にして砂鹵の土と化し。沼湖の地と爲り。晌午フォートウィリアムに達す。フォート、ウィリアムは。

シュペリオル湖畔に在り。水利に便なるを以て要港と爲り。加奈太曠原收穫の禾穀は。大半此を經て。歐米に流輸す。故に人口僅に二萬にして。蕭條たる小市に過ぎすと雖も。貨物此に集散し。諸凡の規模頗る大なり。此地と比隣のフォート、アーサーとを合して。昇降機の動力。年に百萬斛に過くと云ふ。要するに大農法の大野を開拓し。船車の禾穀を運搬する。其規模の雄俊碩偉なる。寔に吾人意料の外に出てたり。

フォート、ウィリアム。フォート、アーサーの二地を歷て。シュペリオル湖畔に沿ひて。馳驁すること數時。此間眺矚絶佳ならすと雖も。數日曠原を經過し。今此新境に接し。亦目を悦はす者あり。

車中時時各國近況の電報を齎らし來る。是日午後三時報あり云ふ。獨逸皇帝は。米國大統領ウヰルソン氏の倡へし議に同して。休戰を請ひ。將に侵略地より其軍を退けんとし。之に對してウヰルソン氏は。其國民を警戒し。獨逸の云爲は。猶ほ未た信するに足らすとせり。又一報に云ふ。近時西班牙（スパニッシ）感冒（グリップス）と稱する疫癘流行し。加奈太東方及米國に瀰漫し。其勢猖獗にして。死者甚た多しと。一行深く警戒す。

ニッケル礦坑

十四日午前十一時汽車サドベリーを經。此地に一大ニッケル礦坑あり。インター、ナショナル、ニッケル會社之を經營して。採掘精煉し。其名大に世に聞ゆ。礦坑は。驛を距ること八哩に在り。規畫潤大にして。産礦年に百五十萬噸。世界産礦什の八を占む。之に附近某山の産礦を合すれは。實に各國年産の什の九に及ふと云ふ。乃ち降車し。會社職員に迎へられて。其精煉所を觀る。

精煉所は。サドベリーの驛外にあり。礦塊を爐に投して。銷煉精製する所と爲す。壯丁服役する者三四千人。焦爍殷紅の礦塊を巨爐に投し。之を鐵條に懸け以て昇騰し。而して之を模型に注流し。以て精煉するなり。看來看過すれは。其光景極めて悽慘と爲す。巡覽畢り。精煉所長の私宅に於て午餐し。更に自動車に乘し。往きてニッケル礦坑を觀る。

坑は斜に大約五十度の角度を爲して。深く地中に陷入す。礦塊を此に掘り。搬ふに昇降機の規模極めて大なるものを用ふ。試みに燈火を手にし。機に賴り坑に降る。瞬間にして一千一百呎を直下し。地中の坑路に達す。暗坑乍にして明朗となり。燭光煒煌し。電車奔馳し。搬礦轔轔の音。碎礦刁刁の聲。雙耳に徹し。喧轟特に甚し。
本精煉所に製する所のニッケルは。七十九パーセントの礦量を含有し。年産七萬四千噸。其直七千有餘萬圓なりと云ふ。以て其昌盛興旺なるを徵すへし。
黄昏汽車此を發し。東向疾走す。

ナイアガラ觀瀑

十五日ナイアガラ、フォルス驛に抵る。サー、ヘンリー、ペラットの爲めに迎へられて自動車に轉乘し。近郊の勝を尋ぬ。是日天碧に氣清く。小春の佳候たり。沿路の秋林。亦丹彩を着け。風光極めて美なり。

走ること八哩。クインストンに踵り。ブロック將軍の記念塔を觀る。塔は矗立一百五十尺。屹然としてナイアガラの巨浸を睥睨し。紅花綠草。其礎に點綴して。日に映し滋を含む。今を距ること百年前。英米の構難交戰するや。將軍偉動を此に樹て。卒に陣亡せり。洵に武人の典型と謂ふへし。

河を逾え對岸に詣り。電車に乘る。會、車丁同盟罷役し。隻車の運轉するを見す。然るに接伴員親王以下の爲めに特に遊覽車を出せしは。寔に應機臨變。分の善を盡すと謂ふへし。河水の浩浩滔滔たるを目し。渚崖を駛せて。ナイアガラ府に抵り。自動車に轉し。米領ナイアガラ公園に如き。懸崖に立ち。謂はゆる大雙瀑を觀る。

ナイアガラ瀑布の雄偉閎闊なること。號して坤輿第一と稱す。目を矚して巨浸を送迎すれは。綠水碧流。滉瀁淼漫し。混混渾渾として。漚を浮へ泡を漂はして至り。斷崖絶岸に至るに比ひて。倏焉として頽落し。忽焉として奔下し。其勢。啻に發箭放彈のみならす。噴沫迸水。烟の如く霧の如く。密雪の如く。散珠の如く。氷簾を垂るゝか如く。白幔を張るか如く。曚曚曈曈として。日光に掩映し。瀑下空處の所。光彩陸離し。俄然として一大青紫黃紅の虹霓を現す。噫嘻盛なり。天下の大觀。亦以て之に加ふるもの莫からん。

乃ち俯瞰して瀑下の風景を撮影せんとすれは。飛瀑巖に碎けて

雪を噴く處。玻璨鏡面に映し。其狀白蛇の蜿蜒たるか如く。中に微幺豆の如きものあり。烟を吐きて蠢動す。諦視すれは則ち觀瀑汽艇の往復するなり。

進みてスリー、シスター島嶼附近に蹕り。其勝を探り。加奈太領に返り。列車に入りて午餐す。

午後二時。松平、山縣二氏と自動車を馳せて。ヴィクトリア公園に如き。昇降機に倚りて懸崖を降り。觀瀑艇に駕し。再ひ赴きて雙瀑を觀る。

ナイアガラ瀑脚俯瞰（其一）

汽艇瀑下に近つくに迨ひて。水聲泓泓として喧囂し。兩耳聾し。語言通せす。飛沫濛濛雨の如く。船客皆護謨帽及外袍を着以て滋濡を防ぐ。然れとも通身尙ほ淋漓たり。迫り近つけは。激浪船を簸け。猋風水を怒らす。甲板の欄に凭り。緘默して仰き睇れは。純白目を驚かし。巨聲耳を聾し。惝怳として淸冷凄寒の一大動體に咫尺するか如し。

更に進みてホールスシュー瀑布の落下し。滙して灣を作す處に至れは。

ナイアガラ瀑脚俯瞰（其二）

驚濤狂瀾。舷を摧き艇を覆さんとし。須臾も停止すへからす。乃ち舵を轉して歸航す。蓋し此瀑布の雄偉閎闊なるを觀んと欲せは。乘艇して迫り視るに如かさるなり。

轉して自動車を騖せ。トロント水力電氣會社の施設を觀る。會社は。ナイアガラの巨浸流れて將に大瀑と爲らんとするの上游に在り。潴崖を掘ること深さ百五十尺。水電發動機を此に設け。水を引き以て業を作す。其機頗る宏大にして。鐵盤を設くること十一。旋轉すること宛然獨樂の如く。秒間も息ます。馬力實に十二萬五千と稱す。

日將に舂かんとす。乃ち歸路再ひヴィクトリア公園を過く。行行回視すれは。瀑布紅樹の間に出沒隱見し。漸冉形を藏し影を匿し。人をして依依去るに忍ひさるの情あらしむ。

既にして汽車に復し。ナイアガラを發し。八時トロントに抵る。此市も亦疫癘流行す。故に深く之を警戒し。山縣少佐と偕に出てゝ散策し。坊市の夜景を觀る。崔嵬巍峩の屋舍櫛比し。伊太利ミラン市の風光あり。婦人女子の徜徉彷徨するもの特に多し。九時此を發し東向す。

オタワ逗留

十六日早晨。オタワに抵る。乃ち車を降り。停車場連接の一大旅館に小憩す。澡浴理髪し。以て旬有餘日の疲憊を醫す。暖房に卽きて。新報を閲し。行旅匆忙の間に。纔に近日時事の梗概を知る。

晌午。加奈太政府總理大臣代理サー、ジョン、フォスターに招かれ。午餐にリドゥ倶樂部に赴く。サー、ジョン、フォスターは。往年歐洲大戰第三年記念會を英國倫敦に開くに當り。會倫敦に在り。クインス、ホールの會場に於て。英國首相アスキス以下名人碩士演説せし時。加奈太政府を代表し。以て大に氣焰を吐けり。今親しく晤語し。人をして轉當時の狀を追想せしむ。

是日來り列する者は。加奈太各省大臣及オタワ駐劄各國領事たり。壯丁復職省大臣余の隣席に在り。余に語りて云ふ。吾省は。開戰後朞年に之を創設せり。屈指すれは創設以後。業を退役兵士に授け。以て生計を爲さしめし者。亡慮三萬餘人。意ふに國家苟も民軍を出さんことを欲せは。尤此に留意せさる可らすと。又謂ふ。我政府は兵士を徵募すること。目今に至り。通計五十萬。全國の人口七百五十萬たるを以て。實に之を什五分して其一に居ると。

午後三時席散し。自動車に駕し。市鄽を觀る。本市はオタワ及リドゥ兩河湊合する處に在り。車載に便に。舟檝に利なり。官衙及議事堂は。河畔の邱上に在り。偉麗高壯。其趣匈牙利國都ブタペストに似たり。進みて近郊の公園を過く。亦秋光闌に。風物閑美なり。薄暮歸る。

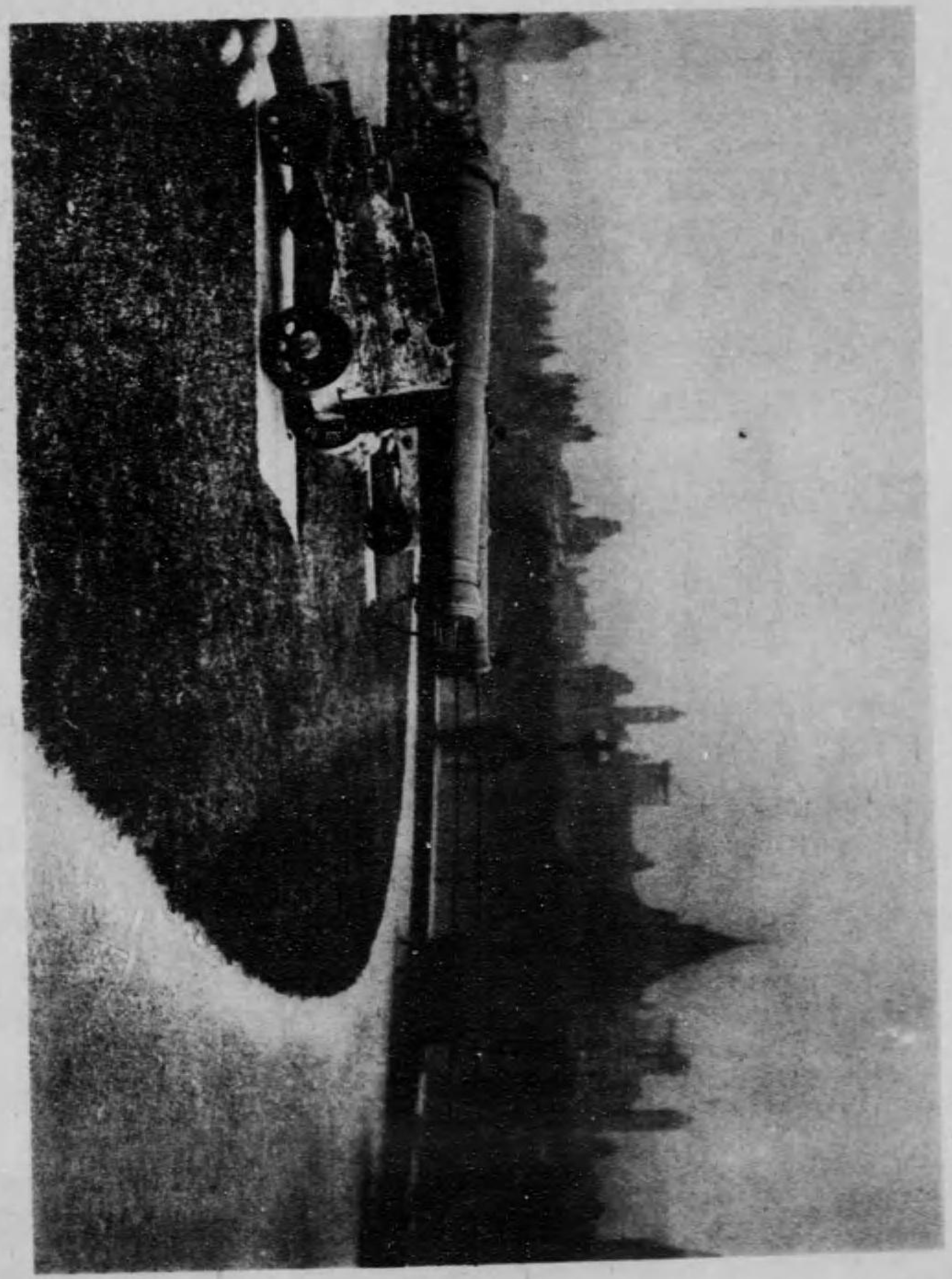
是日親王台誕の辰に當りたまひ。晩餐に隨員を召したまふ。菊花を桌上に列し。芬芳燦爛たり。隨員一齊陪侍し。台算の無疆を祝し

露光量違いの為重複撮影

オタワ都城

奉る。異境佳辰令節に遭ひ。恩遇を拜すること此の如きは。寔に榮幸と謂ふへし。十時汽車此を發し東向す。

露光量違いの為重複撮影



オタワ都城

奉る。異境佳辰令節に遘ひ。恩遇を拜すること此の如きは。寔に榮幸と謂ふへし。十時汽車此を發し東向す。

クヱベック都城

十七日黎旦。クヱベックに到る。車を降りて旅館に投す。萬里の行程。旬有餘日の間。其宿する處。率ね汽船に非すんは則ち汽車なり。然るに本日旅館一宿に定る。衆皆怡懌し。意氣自ら揚る。

旅館はシャトー、フロンテナックと稱し。セント、チャールス及セント、ローレンス兩河相會する處に在り。其地邱阜を爲して斗出し。而して旅館は。隆崇高峻。碧空に聳ゆ。檻欞に立ちて眸を凝らせは。則ち四方の風景歷歷として目に盈ち。頗る快適を覺ゆ。館内の裝飾も。亦粲麗にして。一に佛國の風を用ふるか如し。

午後。市に出てゝ散策す。獸皮毛氈。此地の名産たり。乃ち數枚を購ふ。其質良にして其直廉なり。既にして自動車に乘り。近郊を周覽す。昔時英佛兩軍爭戰の古墟を過き。英將ウォルフの記念塔を弔

ふ。礪石修長。屹然として天を衝き。宛も親しく英魂毅魄に冥漠の中に接するか如し。

史に云ふ。西暦一千七百五十九年九月中旬。英將ウォルフ兵を帥ゐ。夜に乘して佛將モントカルムの壘を襲ひ。クェベック城の背後に肉薄し。兩軍遂に城西の邱に戰ふ。殺傷過當なり。時にウォルフ創を被り。將に死せんとするや。適〻敵兵退くを聞き。策を定めて之を追躡せしむ。佛將モントカルムも。亦一時の名將にして。善く戰ひ善く防き。竟に重傷を負ふ。軍醫診して謂ふ。將軍傷重し。死旦夕に迫れりと。モントカルム之を聞き。莞爾として笑ひて曰く。予は寧ろクェベック城の陷るを目せすして瞑するを悅ふのみと。兩將の如きは。勇武壯烈。雙璧聯珪と謂ふへし。今に至り傳へて以て美談と爲す。

晩餐後。復山縣少佐と出てゝ夜景を觀る。疫癘流行するを以て。肆廛皆休業閉扉し。行人稀少に。寒風肌を衝き。極めて寂寞寥落たり。歸館し。貴賓閣に音樂歌謠を聽き。書を讀み宵分に訖り。始めて臥蓐す。

十八日。秋空蔚藍拭ふか如し。松平、山縣二氏とクェベック橋を觀んとし。自動車を駛せて行くこと少時。遙に郊坰を隔て。蔭林を穿ち。一大鐵桁の彎を成して天に彌り。虹霓の空中に涌現するか如きを矚る。既にして達す。

橋は客歳九月竣工せし者にして。恢廓廣大。寰宇無雙と稱す。其長三千二百四十呎。廣八十八呎。橋下百三十六呎。用鐵總量六萬六千噸。經費三千萬圓。其礎石の量目は。クェベック闔市所用石の量目に過くと云ふ。而して橋上に鐵軌二條。車道一條。行人通路二條を

設く。以て其大川に横架するの状を想望すへし。
乃ち看守を導者とし。橋上を漫歩し。一再往反して。中腹に佇立し。頫瞰すれは水色紺碧。鐵柱數十百根縱横交叉し。脚下數百呎の所に在り。寫眞機を以て處所を撮影して去る。
三時クェベックを發し。ハリファックス港に向ふ。汽車西駛し。クェベック鐵橋を過き。復東轉してセント、ローレンス南涯の河堤に沿ひて駛す。河を隔てゝクェベックを望めは。夕照水を射て。暮氣將に氛氳たらんとす。

ハリファックス到港

十九日。汽車將にノバスコチア半島を經過せんとす。此に至り。時針を前むること一時間。以て午正に符合せしむ。蓋し長途の行旅たるを以て。自ら時差を生す。故に之を是正するなり。
沿道丘垤起伏し。其間藪澤あり。灌莽沮洳たり。林木丹絳の地を歴れは。宛然として紅火燄燄の中を行くか如し。
午後五時。始てハリファックスに達す。ヴィクトリア發後正に十日。此に至り。加奈太三千五百哩の行程を經過す。
顧ふに加奈太茫漠の山河沃土。耕耘に。牧畜に。植林に。採礦に。事業大に進み。成績日に擧る。然れとも遺利剩益の將來力を效すへき者猶ほ鮮からす。蓋し幾千萬の移民を待ちて。始て隆盛を期すへし。英國加奈太領の豐富肥饒なる。洵に吾人意料の外に出てたり。

オルヴィエト號坐乘

汽車ハリファックス埠頭に踵りて停る。英國假裝巡洋艦オルヴィエトは。艤して拔錨を竢てり。兵士銃を手にし。鐵道の左右を警衞し。プラット、フォームには。海陸武官。肅然として親王を拜迎す。親王乃ち一揖して車を降り。船に遷りたまふ。船上海兵森列儼立し。銃を捧け以て敬意を表す。

船は舊と英國濠洲間を度航通商せしもの。開戰するに迨ひて。始て武裝し。主として英國南米間を警備せり。其載量一萬二千噸。製後多く年所を歷しと雖も。營造宜しきを得。頗る堅牢なりと云ふ。目下六吋砲八門高射砲二門を備へ。別に魚雷及パラヴェーンと稱する機雷截斷器を有す。船長イングランド大佐は。眞率にして極めて快活。親王以下を待つこと。頗る慇懃なり。

ハリファックス海軍軍港長及陸軍衞戍司令官等來訪して。敬意を表す。

艦長我晩餐に陪侍して款待す。余輩英釀の酒を口にせさること良久し。此に至りて數杯を傾け。醺醺として微醉す。餐畢り。士官室に造り。談笑すること之を久うす。士官は概ね戰爭の初。軍籍に入りし者。及豫備役に在りし者の如し。英國士紳の品格風容自ら備り。人をして津津として之を敬愛せしむ。

太西洋程

二十日。午前ハリファックス州知事及秘書官等來りて親王の台安を候ふ。會〻無線電信あり云ふ。敵國二三の潛水艇加奈太東方の近海に出沒し。昨日の如きは。ハリファックスを距ること二百五十海里の滄海に於て。我船舶を追尾すと。是に於て。本艦は晝泊夕發し。以て敵の耳目を避けんと欲し。午後五時を期し。拔錨して將に太西洋の航程に上らんとす。

既にして期至り。艦發す。潛水驅逐艇數隻之か先導を爲し。以て海上淨掃の役に服し。飛行機二機追隨して。以て海面監視の任に當る。此夕風濤較〻起り。艦の搖撼較〻甚し。進みて敵艇出沒の瀛海に入る。本艦の航行すること。每一時凡十七海里とす。故に日行三百有餘海里なり。

オルヴィエト甲板上

二十一日。既にニューファウンドランド東南斗出の岬外を經て。大洋に出つ。蓋し此東南斗出の岬外を。尤敵國潛水艇橫行猖獗の所と爲す。

是日英國トラファルガー海戰克捷の佳節たり。親王艦長の請に應し。隨員を從へ。士官室に臨みて之を賀したまふ。艦長乃ち太白を擧けて。謝辭を呈す。

二十二日。風迅く。艦稍〻搖撼す。此航海本日以外は。率ね安恬なり。但陰翳下雨の日多く。人をして微〻鬱悒たらし

む。

解纜後。毎夜儆戒懈らす。一旦事あれは随員各〻其爲すへき動作を豫定し。謂はゆる警急準備の姿勢を以て假眠す。二十三日に至り。暮夜始めて靜晏なり。自後淸悞嬉戯し以て間を消す。船員吾人の爲めに甲板に射的場を設け。又月水金曜日の三夜は。特に下甲板室に於て。活動寫眞を爲し。以て無聊を慰せしむ。

聞く本艦オルヴィエトは。嘗て獨逸巡洋艦エムデン艦長を護送す。エムデンは。戰争の初。濳に青島を脫し。印度洋に跋扈し。聯合國船を襲擊すること十有餘艘。竟に英艦の破る所となる。而して艦長の本船に幽せらるゝや。一嚢を有し。護惜備さに至る。窃に之を檢すれは。貨幣其中に滿ち。悉く剽掠せし者に係ると。今に至りて猶ほ船員の話柄と爲る。好漢の末節に失する。亦憫笑すへし。

二十七日。進みて西經十五度を過き。再ひ潛水艇猖獗の瀛海に臨む。英國豫め驅逐艦を派して。來り迎へ護衞せしむ。然るに曉來細雨微茫。濃霧四塞して。咫尺を辨せす。爲めに相値ふ能はす。是に於て。本艦は危に瀕するを避け。囘反して西航し。午前九時。復反轉東航す。片時にして霧將に霽れんとし。四外曠曠。漸く朗然たり。會〻艦舳四五海里を距り。銀浪を翻へし。黝煙を吐き。以て追躡するものあり。双眼鏡を以て遐に之を矚れは。則ち英國驅逐艦たり。乍にして亦一艦濃霧を破りて出現し。二艦急航し。匆忙本艦に追及せんとす。時に霧霽れ。紅旭輝輝として滄海を射。艦員一齊に。神氣の快暢するを覺ゆ。

二艦はH二十一號及H二十三號とす。約一海里を距り。本艦に左右し。終始護衞して。騈走齊航す。淼淼たる滄海。蔽ふに濃霧を以て

し。而して約略豫定の所に於て遭逢せしは。操船航海の術。練達精到せるか爲めと雖も。亦無線電信の利器に資すること鮮からすとす。

余寫眞機を執りて。驅逐艦追及彼我回光通信交叉の狀を撮影す。艦長來觀一揖し。破顏微笑して曰く。我驅逐艦既に已に本艦に左右せり。本艦の晏如たること萬に一失なしと。安堵の狀。自ら其顏貌に呈露す。本艦明旦英國プリマウス港に入らんとし。少壯士官の意氣揚揚たるを見る。

危險海上の警備

英國登陸

二十八日昧爽。本艦は英國近海敵國潛艇出沒の域を踰えて。英蘭西南海角の軍港デヴォンポートに投錨停泊す。機關音響の頓に靜止せるか爲めに。殘夢一覺し。興きて甲板に立ては。軍港は曉霧の爲めに掩はれ。蒼烟深く罩めて。宛然として猶ほ夢幻の中に在るか如し。

午前七時。艦前みて埠頭に着く。親王九時を期して登陸したまはんとす。故に來迎者未た至らす。駐畔すれは則ち國旗を揭け。踏几を設け。儀仗兵整列し。頗る忙劇なり。期に訖り。我珍田駐英全權大使捨己、大使館附武官飯田海軍少將久恒、田中陸軍少將國重、吉田一等書記官伊三郎等來艦し。一路の台安を拜賀し。且英國百端準備鄭重の狀を上啓す。

英國皇姪コンノート殿下親王の儐と爲り。十時接伴員英國陸軍中將サー、ウィリアム、パァルトニー、侍從サー、チャレス、カスト、陸軍中佐伯爵ペムブローク、アンド、モントゴメリー、陸軍少佐レスリー、ローリー、ヒルを從へ。來艦し親王を迎へたまふ。親王乃ち艦門に出てゝ。殿下を導きて艦室に入りたまふ。我隨員亦皆扈從す。殿下及接伴員は。我親王以下と疇昔東京に於て曾識たり。故を以て彼我歓接歡娯し。怡怡愉愉として。滿室俄に春を生す。デヴォン州知事伯爵フォーテスキュー亦來艦して。台安を候ふ。

既にして親王登陸したまへは。デヴォン軍港司令官某英國陸軍南部管區司令官某も亦來り拜し。而して一隊の英國海兵等は。埠頭に整列し。捧銃の禮を爲し。表敬して奉迎す。又軍樂の一隊は。我國歌を奏す。聲音瀏亮耳に徹す。我國歌を異域に聽く。特に人をし

コンノート殿下台迎

て肅穆莊敬たらしむ。奏樂の間に。親王整列の海兵に對し閲兵し。畢りて皇室所用の列車に升りたまふ。

本列車は倫敦より特派せし者に係り。百端の設備。絢飾彫鏤を用ひすして。善美幷ひ盡くせり。本機關車の私號を流星と曰ふ。今特に本機關車を簡ひしは。我國旭日を以て徽章と爲すか故に。之と聯を爲し對を取りしと云ふ。以て英國の我に對し用意の周匝なるを闚ふへし。

十一時十五分汽笛一鳴し。汽車徐ろ

に發軔す。士紳兒女より卒徒役夫に至るまて。目送目迎し。手を擧け帽を振り。歡呼して敬意を表す。是時曉霧既に霽れ。デヴォン要塞の城廓は。巍然として天の一方に聳へ。海上の艨艟と相對して。大英國海角の雄鎭たるを示せり。

汽車街衢を過き。郊坰を駛す。行行英蘭田舍の秋光を看れは。村情野趣。亦掬すへきものあり。倫敦のデヴォン港を距ること二百二十九哩。而して汽車停せす留せす。迅走經過し。午後三時四十五分。倫敦パッディングトン驛に達す。

驛は日英の國旗を以て之を飾り。英國皇帝陛下親ら來り迎へ。プラット、フォームに臨みて。列車の至るを待たせたまふ。列車既に停留し。扇扉開くや。翕如として樂作り。洋洋乎として耳に盈つ。親王皇帝と握手して相揖したまひ。又顧みて我各隨員を合介したまふ。皇帝乃ち一一握手の禮を賜ふ。尋て親王皇帝に前導せられ。侍立の儀仗兵を閲兵したまふ。

是時親王を迎接せる者を。コンノート太公殿下、倫敦州知事クリニュー侯爵、英國政府代表者外務次官ロード、ロバート、セシル、主馬頭チェスター伯爵、英國國防軍司令官陸軍大將サー、ウィリアム、ロバートソン、倫敦衞戍總督陸軍少將ジョフレー、フォルディング等と爲す。其他爵紳貴介。文武大官。羅立森列し。又我國人の此に寓する者來り集り。遙に隊を作して拜迎す。

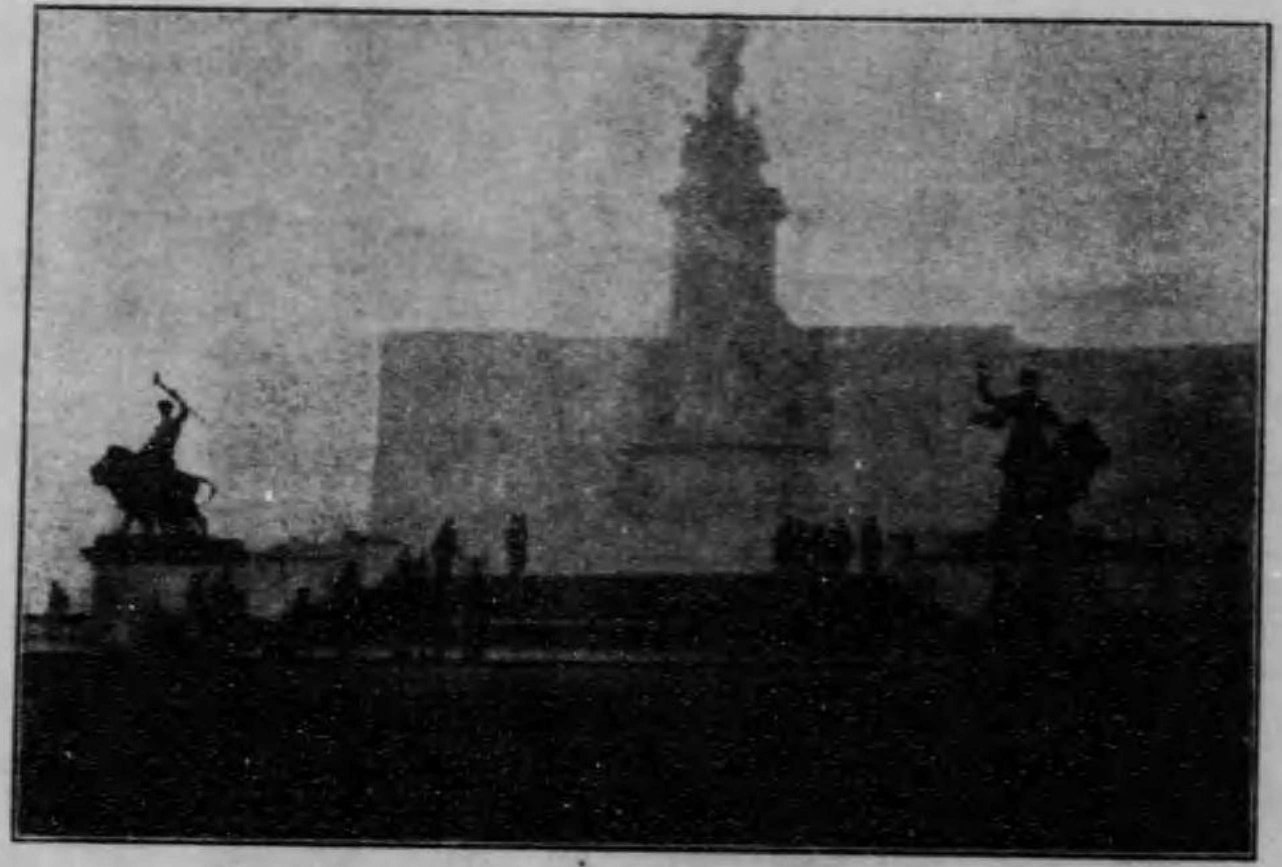
閲兵畢り。親王は皇帝及コンノート太公殿下、コンノート殿下と偕に駟馬の車に御し。徐徐として驛を出てたまふ。

鹵簿の次第を擧くれは。則ち第一車は。皇帝及親王等にして。儀仗騎兵其前後を護衞す。第二車は。珍田駐英大使、井上侯爵、チェスタ

ーフォルド伯爵、サー、ウィリアム、バァルトニー中將。第三車は。柴陸軍中將、小栗海軍中將及余、ベムブローク、アンド、モントゴメリー伯爵。第四車は。松平子爵、雨宮海軍軍醫大監、南郷海軍大佐、サー、チャレス、カスト侍從。第二車より第四車に至るまで。竝に騎馬と爲す。第五車は山縣海軍少佐、高橋宮內事務官、コンノート太公殿下隷屬武官、コンノート殿下隷屬武官にして。別に騎馬將校扈從す。

過くる所の街巷。士女麋至羣集。左右に塡塞し。旗を振り帽を擧け。以て齊しく萬歲を叫ふ。英人云ふ。是の如き盛儀是の如き歡聲は。開戰以後。未曾有の事に屬すと。

ハイド、パークに造り。林間を過くれは。落葉散布し。秋暮蕭索の氣。自ら此に充盈し。加ふるに陰曀幽鬱の天宇を以てし。而して戰爭



英京バッキンガム王宮

多年。國人皆憔悴困憊し。其衣服の如きも。往年來遊の時に比し。華麗變して素朴と爲り。覺えす心に惻惻たる者あり。而して樹陰柵外。此に屯し彼に聚り。車駕を迎へ以て敬意を表す。其景象寔に憐むへし。就中隻手の兵。片脚の卒。帽を脱し大賓を迎ふるに至りては。人をして特に中懷に戚戚焉たらしむ。

騶馬騑騑として。ハイドパーク、コアナー。コンスチチューション、ヒルを歷て。王城に向ふ。既に達すれは。儀仗

兵の一隊。旌旆を褰けて親王を拜迎し。軍樂に我國歌を奏す。親王階下に詣りて。車を降り。近衞儀仗隊に對し。皇帝と同列閲兵したまふ。是時軍樂又作り。鏗鏗鏘鏘として。律諧ひ呂和し。杳眇雄高。響殿堂の四壁に徹し。渢渢乎として眞に春容大雅の音あり。

既にして親王阼階を升り。以て殿に入りたまふ。殿內は大理石を以て構築し。宏廓華絢。晶晶として目を驚かす。皇后宮內親王と倶に女官に圍擁せられ。玉趾蓮步したまひ。進みて親王に對し一揖し。又親王の台介を以て。隨從各員に握手の禮を賜ふ。

皇后宮は濃藍淡紺の服を服し。胸間に眞珠を懸けたまひ。內親王は淺縹の輕綃織羅を纒ひたまひ。仙媛玄女の九天より降りて玉階に臨みたまふか如く。淵雅高尙にして。窈窕婉淑の風自ら備りたまふ。

對話したまふこと片時にして。親王謝して退きたまふ。隨員亦皆退く。親王及井上侯爵。南鄕皇族附武官は。バッキンガム宮に。餘は宮側のホテル、ルーペンスに宿す。ホテルは皇帝の特に宸擇したまひし者に係ると云ふ。

黃昏再ひ王宮に升り。正殿（スローンルーム）に於て。元帥號捧呈式の豫習を爲す。時に親王以下一齊叙勳せられ。余はヴィクトリア第三等勳章を拜受して歸館す。

是日倫敦各種の新聞は。日本の大賓に對し。頌辭を掲け。敬意を表し。洽りに日英國交の厚きを稱し。且日本帝國戰時行動の信を重し義に厚く。而して凡百機宜に適せしを宣揚し。以て大に之を賀せり。

元帥號捧呈

二十九日。翳。親王　皇上の宸翰を英國皇帝に親呈し。元帥刀を進捧したまふの日と爲す。今備さに盛典鴻儀を錄すれは。午前九時四十分。隨員の文官たる者は通常禮服を服し。武官たる者は軍裝して。旅館を出て。王宮に登る。

正殿（スローンルーム）には皇帝の出御に先んし。駐英全權大使子爵珍田捨己、大使館附一等書記官吉田伊三郎、同二等書記官林久治郎、同矢田七太郎、大使館附海軍武官海軍少將飯田久恒、同陸軍武官陸軍少將田中國重は。玉座に對して左側に。英國海軍元帥サー、チャールス、ホザム、同サー、イー、エイチ、セイモーア、同サー、アーサー、ウヰルソン、同サー、アーサー、ファンショウエ、同サー、ウヰリアム、メー、同サー、ヘドウチルス、ミユークス、同サー、ジョージ、カラハン、陸軍元帥サー、エヴヱルン、ウッド、同ロード、グレネル、同サー、チャールス、イゲルトンは右側に。各其班に依りて列立す。

期に屆り。皇帝皇后宮と偕に。メーリー內親王、コンノート太公殿下、コンノート殿下を從へて出御したまふ。宮內大臣ファルクアール子爵及侍從長サンドホルスト子爵前導し。主馬頭チエスターフヰルド伯爵、皇后宮御用掛サザランド公爵夫人、主殿頭サー、デレック、ケペル、侍從職主事サー、ドグラス、ドウソン大佐、式部長官サー、アーサー、ワルシ、侍衞司令官某、御附武官某等扈從す。

此間我特派大使親王以下各隨員便殿に會集し。期の至るを待つ。便殿を綠之間（グリーンルーム）と稱す。

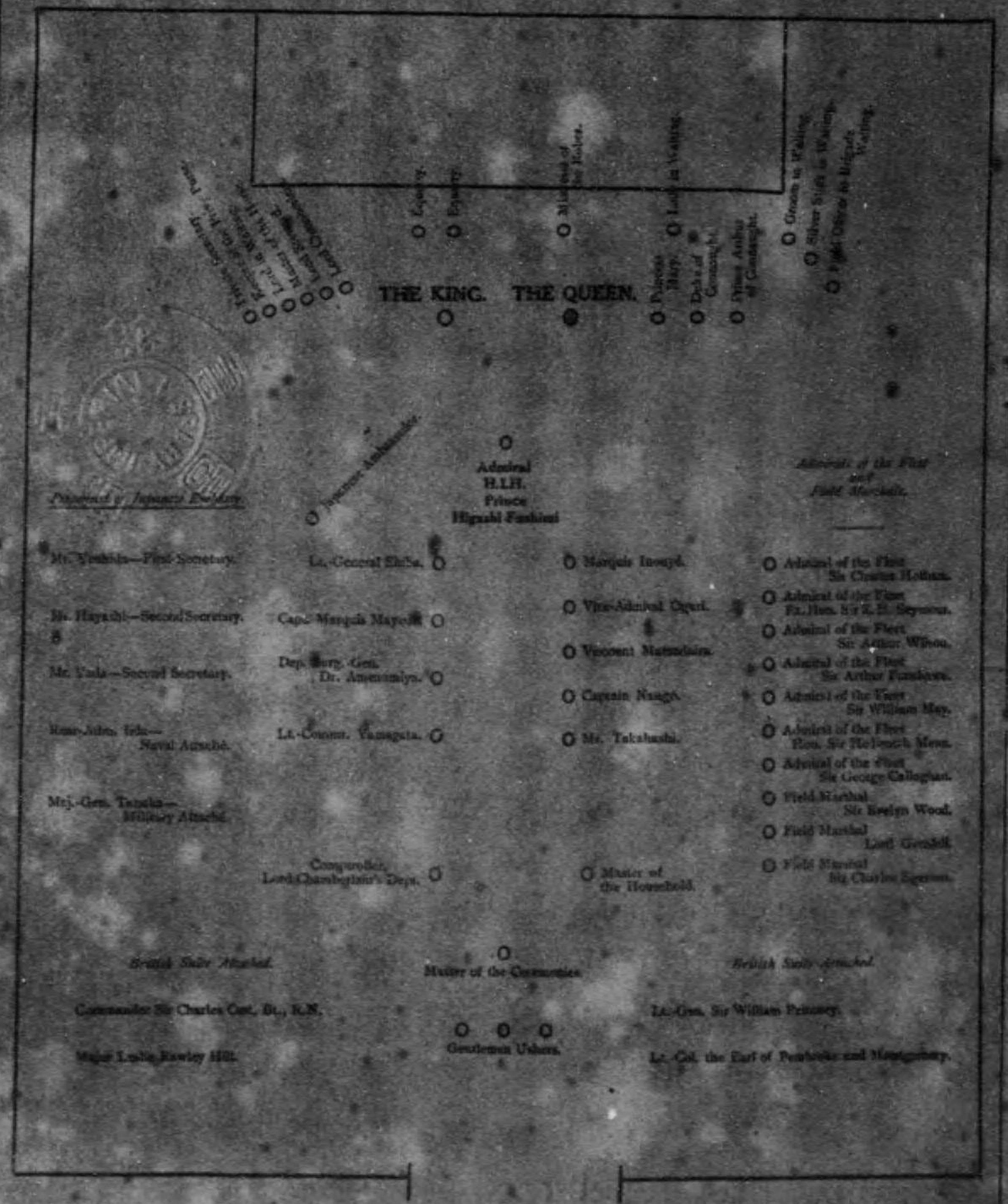
既にして正殿の扉開く。親王以下珍田大使の唱名に應し。班末より次を以て御前に晋む。是に於て宮內事務官高橋皞先つ進み。之

露光量違いの為重複撮影

元帥號捧呈式班列

當日班列員ニ頒タレシモノ 但縮圖ニ係ル

Presentation of the Sword and Badge of a Field Marshal in the Imperial Japanese Army to His Majesty The King by Admiral His Imperial Highness Prince Yorihito of Higashi-Fushimi on Special Mission from His Imperial Majesty The Emperor of Japan, in the Throne Room, Buckingham Palace, on Tuesday, the 29th October, at 10 a.m.



に繼く者。海軍少佐山縣武夫、海軍大佐南鄕次郎、海軍軍醫大監雨宮量七郎、式部官子爵松平慶民、陸軍步兵大尉侯爵前田利爲、海軍中將小栗孝三郎、陸軍中將柴五郎、宗秩寮總裁侯爵井上勝之助とす。其將に入らんとするや。躬身敬拜し。然る後ち。前みて既定の位次に立つ。先つ至る者は後列に在り。後に至る者は。漸く超えて前列に就く。

最後に親王の入りたまふや。軍樂隊我君ヶ代の曲を奏す。鏗爾として作り。雅聲耳に徹し。鏘然として鳴り。逸音殿に振ひ。繇繇として絕えす。隆隆として響き、虞韶を奏するか如く。仙樂を聽くか如く、恍として躬の異域王庭に在るを忘れ。而して忠君報國の念。油然として自ら生す。

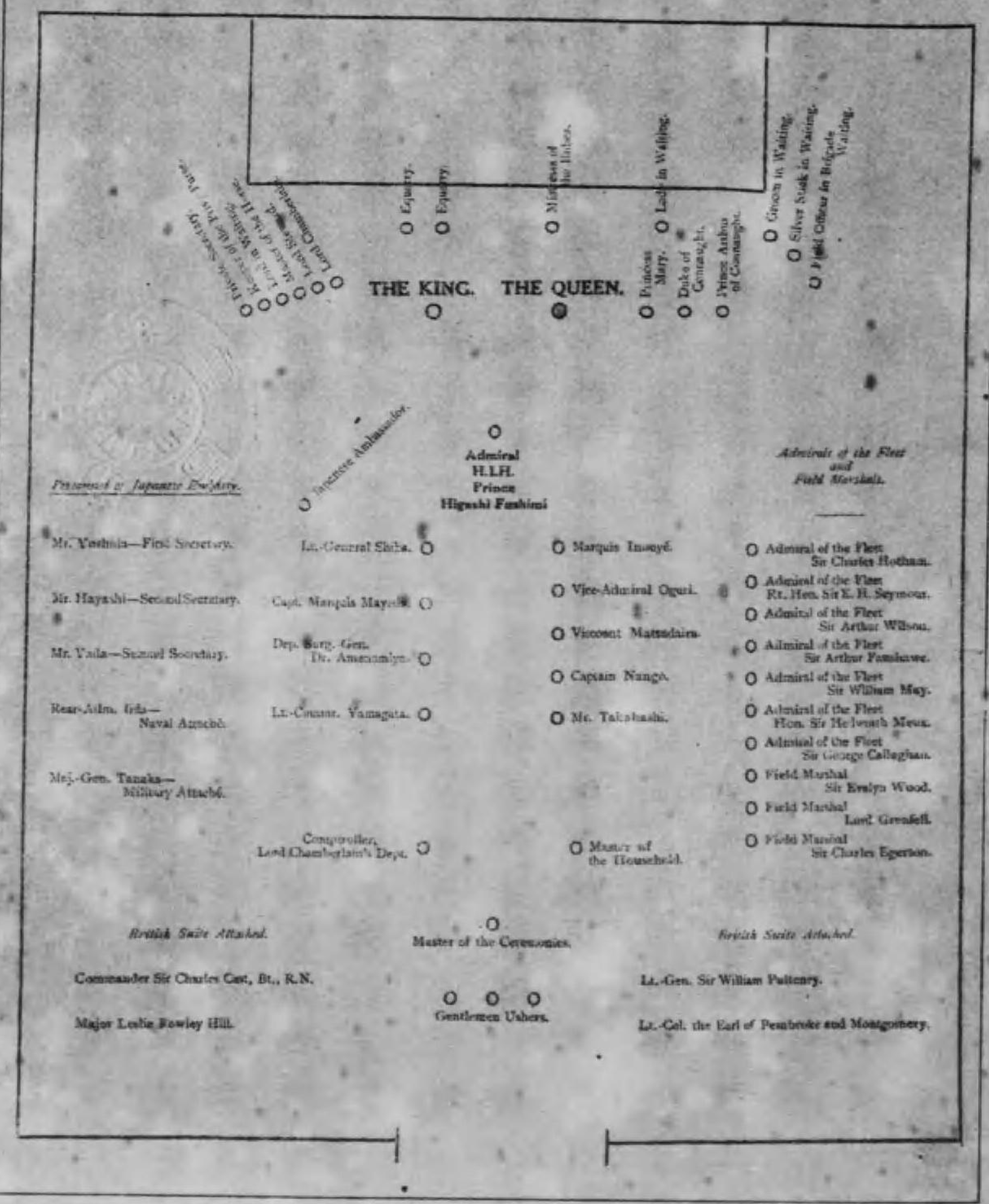
親王既に次に就きたまふ。井上侯爵乃ち我　天皇の宸翰を捧持

露光量違いの為重複撮影

元帥號捧呈式班列

當日班列員ニ頒タレシモノノ但縮寫ニ係ル

Presentation of the Sword and Badge of a Field Marshal in the Imperial Japanese Army to His Majesty The King by Admiral His Imperial Highness Prince Yorihito of Higashi-Fushimi on Special Mission from His Imperial Majesty The Emperor of Japan, in the Throne Room, Buckingham Palace, on Tuesday, the 29th October, at 10 a.m.



に繼く者。海軍少佐山縣武夫、海軍大佐南郷次郎、海軍軍醫大監雨宮量七郎、式部官子爵松平慶民、陸軍歩兵大尉侯爵前田利爲、海軍中將小栗孝三郎、陸軍中將柴五郎、宗秩寮總裁侯爵井上勝之助とす。其將に入らんとするや。躬身敬拜し。然る後ち前みて既定の位次に立つ。先つ至る者は後列に在り。後に至る者は漸く超えて前列に就く。

最後に親王の入りたまふや。軍樂隊我君ヶ代の曲を奏す。鏗爾として作り。雅聲耳に徹し。鏘然として鳴り。逸音殿に振ひ。繇繇として絶えす。隆隆として響き、虞韶を奏するか如く。仙樂を聽くか如く。恍として躬の異域王庭に在るを忘れ。而して忠君報國の念。油然として自ら生す。

親王既に次に就きたまふ。井上侯爵乃ち我　天皇の宸翰を捧持

して。親王の背後より。徐ろに其右側に進みて之を上る。親王受けて。台聲珊珊として之を朗誦したまひ。畢りて之を皇帝に捧呈したまふ。

次に柴陸軍中將元帥刀を捧持して。亦親王の背後より。其左側に進みて之を上る。親王受けて之を皇帝に捧呈したまふ。

次に小栗海軍中將右側に進みて。元帥徽章を親王に上る。親王受けて之を皇帝に捧呈したまふ。

是に於て。皇帝は我　天皇に答へて叡旨の優渥なるを謝するの書を朗誦したまふ。其書に曰く。

朕の戴冠式に當り。迎へて國賓と爲し。朕をして追思榮幸を覺えしめし殿下。今又大日本帝國皇帝陛下の欽命を奉し。親しく我國に台臨したまふ。朕の中懷忻懌に堪へさる所なり。

大日本帝國皇帝陛下。朕に日本國元帥の稱號を贈りたまひしは。寔に榮幸とす。而して特に之を殿下に受けしは。更に光輝あるを覺ゆ。其稱號と共に貽りたまひし元帥刀及徽章は。徒に視て以て日本國至高班位を表彰すと爲すのみならす。并せて陛下友誼の至渥なるを證する者とし。悠久に之を保有せんとす。」

顧ふに陛下の壯勇なる陸海兩軍は。正義と自由を擁護すへき朕か忠良の戰友なり。冀くは兩帝國の協同努力に賴り。將來兩國の交誼並に結束をして。益々鞏確深厚ならしむる者あらんことを。

曩日從弟アーサー、オブ、コンノート親王。朕及朕の國民を代表し。山河秀麗の貴國に赴くや。陛下竝に貴國朝野誠悃の歡待を受く。本日を機とし深く謝意を表するは。朕の欣幸とする所なり。

朕は爰に敬重する同盟國の陛下に對し。眞淳なる衷情を呈露し。并せて聖壽の無疆皇室の隆昌及貴國人民の安寧幸福ならんことを祈る

と。玉音琅琅として。人の肺腑を穿ち。宮殿の裡。崒寂森嚴。宛然として重淵深潭の中に在るか如し。儀閟り。一齊席を退き。殿内の一室に集り。撮影し以て記念と爲す。

欽みて惟ふに。日英同盟は　明治天皇の宸猷に成り。爾後十有九年。約結彊明。交誼益々厚し。今大戰に際し。　皇上前には東洋の禍根を斷ちたまひ。後には艦艇を地中海に送り。以て聯合軍を救援せしめたまふ。是れ一に同盟を重んしたまふ所以なり。今や露國既に倒れ。獨墺方に委靡し。宇内の形勢。將に更に一變せんとす。此の

時に當り。益〻訂盟の誼を厚うし。相依り相扶けて進むは。是れ獨り兩國の利權を擁護するのみに非さるなり。正義公道を世界に維持するに於て。洵に缺く可らさる所とす。余曩日コンノート殿下の我國に台臨し。我皇室の優遇する所と爲りたまふを拜し。而して今又親しく英國宮殿に於て。盛典鴻儀を瞻る。是に於て乎。兩國皇室交誼の滋〻厚きを拜觀し。心窃に欣懌悅豫に堪へさるものあり。

倫敦淹留（其一）

是日午前十一時。親王以下コンノート殿下の嚮導したまふ所となり。自動車を駛せ。ウルウキッチ練兵場に如く。英國國防軍總司令官陸軍大將ロバートソンは。本場の一偶に於て。親王を拜迎す。ロバートソン大將は。往年參謀總長と爲り。キチナー元帥と名を齊うし。聲望嘖嘖として世に聞ゆ。

是日練兵場には。高く我旭日旗を揭け。以て親王の台臨したまふを表し。軍樂隊は。我君ヶ代の曲を奏す。

既にして砲兵聯隊は。整齊運動を起し。以て親王の台前に分列式を行ふ。此間活動寫眞班來りて。之を撮影せんと欲し。洊りに焦心苦思するを睹る。又砲兵放列布置の動作及砲戰中毒瓦斯を受けたる時の動作を演出す。其用ふる所の砲車。咸く迷彩（カムフラーヂ）を施けるは。

特に吾人の駐意を引けり。

轉して砲兵學校に造る。白面少年數百人隊を爲し。操砲に體育智育に。百練千磨肄習するの狀を目し。英國亦好箇の後進尠からすとの念を作す。

午後一時。砲兵將校倶樂部に入りて午餐す。時に將校來り會する者數百人。蠭屯蟻集す。而して堂宇廣大。一望雲の如し。此間軍樂作る。其音壯烈。人をして自ら感奮興起せしむ。本日台覽演習の砲兵聯隊長某。余の隣席に在り。乃ち與に倶に閑譚す。余試みに英軍の近況を叩けは。某縷縷として之を述ふ。

尋て砲兵乘馬練習所を覽觀し。更にウルウヰッチ軍需品製造場に踵る。

ウルウヰッチ軍需品製造場は。廣袤數十萬步。自動車を驁せ以て

之を巡閱するも。霎時の能く辨する所にあらす。其服業者男女通計二萬人。主として製彈に從事すと云ふ。妙齡の女子。鐵鑛爐炭の沾汚する所と爲り。鉗槌を揮ひて砲彈を鑄るを觀る。意氣勇壯。行間の兵士を以て自ら任するものゝ如し。而して吾自動車の過くるに値へは。粲然微笑し。手を捧け以て歡迎す。其眞情流露し。可憐の狀。形貌に躍如たり。

吁纖弱の婦女子を以て丈夫の業に服し。壯丁を催して出征せしむるに至りては。其意氣の壯なる。寔に贊揚すへし。而して方今の大亂に對し。擧國一致の志趣。滃然として自ら此に現る。乃ち我帝國の婦女子の如きも。大に體育に駐意し。國家一旦事あれは。則ち能く丈夫に代りて業に服するを以て典要と爲さゝる可らす。抑。余窃に思ふに。早晩亂平き。壯丁歸國して職業に就き。而して數十

萬の女子。此等戰事の業に慣れ。家に還りて中饋針黹に甘せさる如きあらは。眞に一大恨事とす。當路者精研詳究。豫め善後を策せさる可らすと。

今夕午後八時三十分。宮中に於て高宴を設け。親王以下を饗したまふ。其儀式の盛なること。開戰後此を始と爲すと云ふ。

倫敦淹留（其二）

高宴の期至る。我隨員の武官は軍裝し。文官は晩餐服を服して宮に登れは。電鐙閃爍。煌煌として白晝の如く。珠殿瓊堂。偉麗照瑩。殆んと眼目を耀眩す。

阼階を升りて大殿に入れは。式部長官迎接して。一一賓客に紹介す。文武大官。爵紳淑女。綺羅を纒ひ。縠綃を尙へ。靜歩徐廻。彼に屯し此に談す。其狀殆んと天堂に到るか如く。施彩の名畫よりも美なり。特に某公爵の夫人の如きは。芳紀二十歳許。嬋娟の花貌。琬琰の玉顏。秀逸瑩徹。名花も爲めに羞るの風あり。

既にして扉開け。隨員次を以て隣室に踵り。皇帝皇后及內親王諸皇族に謁し。轉して食堂に入る。食堂は四方に羅紗の幃帳を垂れ。以て之を裝飾す。其色殷紅目に映す。又各壁に大玻瓈鏡あり。光晶

として迭に暉映す。堂の中央に。長方形の大桌を置き。桌上に黄金の盛花盤八基を列す。每基高六尺許。其間に更に盛花の小盤數十基を配置す。紅白綠碧。芬芳馥郁として。其色鮮麗。其香衣を襲ふ。而して觥盂盆盎に至るまて。亦皆黄金を以て之を製せり。側に聞く此等の諸器は。皆皇室の瓌寶に係り。今日高宴を設くるか爲めに。皇帝特旨を下して。ウィンゾル城の寶庫より出して此に致せしものなりと。以て其親王を優遇厚待したまふを觀るへし。

皇帝乃ち徐徐として桌に卽きたまひ。主賓亦皆桌に就く。其座次は。皇帝に對して皇后宮と爲し。皇帝の左をベトリス妃殿下、柴中將と爲し。右をルイス妃殿下、井上侯爵、コンノート妃殿下及余竝にジョアン、マルホランド夫人と爲す。皇后の右を依仁親王、メリー內親王と爲し。左を元帥コンノート太公殿下、珍田子爵夫人、コ

將と爲し右をルイス妃殿下、井上侯爵、コンノート妃殿下及余竝
にジョアン、マルホランド夫人と爲す。皇后の右を依仁親王、メリ
ー內親王と爲し左を元帥コンノート太公殿下、珍田子爵夫人、コ

大饗席次　當日陪餐員ニ頒タレシ者但原寸ニ係ル

BUCKINGHAM PALACE.

DINNER SITTING LIST. TUESDAY. 29th OCTOBER, 1918.

STATE DINING ROOM,
at 8.30 p.m.

Capt. B. Godfrey-Faussett, R.N.
Master of the Household
Major Leslie Rowley Hill

FIREPLACE.	WINDOWS.
Hon. Sir Arthur Walsh	Commander Sir C. Cust, Bt., R.N.
Lieut.-Colonel Earl of Pembroke and Montgomery	Lord Colebrooke
Lord Weir	Lieut.-General Sir William Pulteney
Lord Revelstoke	Lord Herschell
Rt. Hon. Lord Robert Cecil, M.P.	Rt. Hon. H. H. Asquith, M.P.
Mr. Akira Takahashi	Viscount Sandhurst
Earl of Chesterfield	Major-General Kunishige Tanaka
Deputy Surgeon-General Dr. Ryoshichiro Amenomiya	Earl Curzon of Kedleston
Lady Mary Trefusis	Vice-Admiral Kozaburo Oguri
Viscount Yoshitami Matsudaira	Duchess of Sutherland
Princess Patricia of Connaught	H.E. the Japanese Ambassador
Lieut.-General Goro Shiba	Princess Mary
Princess Beatrice	Admiral Prince Yorihito of Higashi-Fushimi
THE KING	THE QUEEN
Princess Louise (Duchess of Argyll)	Field-Marshal Duke of Connaught
Marquis Katsunosuké Inouyé	Viscountess Chinda
Princess Arthur of Connaught	Prince Arthur of Connaught
Captain Marquis Toshinari Mayeda	Lady Ampthill
Lady Joan Mulholland	Admiral Marquis of Milford Haven
The Lord Chancellor	Captain Jiro Nango
Lieut.-Commander Takeo Yamagata	Lord Annaly ~~Rt. Hon. James Lowther, M.P.~~

Capt. B. G[illegible]

Master of th[illegible]

Major Lesli[illegible]

FIREPLACE.	WINDOWS.
Hon. Sir Arthur Walsh	Commander Sir C. Cust, Bt., R.N.
Lieut.-Colonel Earl of Pembroke and Montgomery	Lord Colebrooke
Lord Weir	Lieut.-General Sir William Pulteney
Lord Revelstoke	Lord Herschell
Rt. Hon. Lord Robert Cecil, M.P.	Rt. Hon. H. H. Asquith, M.P.
Mr. Akira Takahashi	Viscount Sandhurst
Earl of Chesterfield	Major-General Kunishige Tanaka
Deputy Surgeon-General Dr. Ryoshichiro Amenomiya	Earl Curzon of Kedleston
Lady Mary Trefusis	Vice-Admiral Kozaburo Oguri
Viscount Yoshitami Matsudaira	Duchess of Sutherland
Princess Patricia of Connaught	H.E. the Japanese Ambassador
Lieut.-General Goro Shiba	Princess Mary
Princess Beatrice	Admiral Prince Yorihito of Higashi-Fushimi
THE KING	THE QUEEN
Princess Louise (Duchess of Argyll)	Field-Marshal Duke of Connaught
Marquis Katsunosuké Inouyé	Viscountess Chinda
Princess Arthur of Connaught	Prince Arthur of Connaught
Captain Marquis Toshinari Mayeda	Lady Ampthill
Lady Joan Mulholland	Admiral Marquis of Milford Haven
The Lord Chancellor	Captain Jiro Nango
Lieut.-Commander Takeo Yamagata	Lord Annaly ~~Rt. Hon. James Lowther, M.P.~~
Marquis of Crewe	Mr. Isaburo Yoshida
Rear-Admiral H. Iida	Rt. Hon. A. Bonar Law, M.P.
Admiral of the Fleet Hon. Sir Hedworth Meux, M.P.	Admiral of the Fleet Rt. Hon. Sir Edward Seymour
General Sir William Robertson	Lieut.-Col. Lord Stamfordham
Rt. Hon. Sir F. Ponsonby	Rt. Hon. Sir Maurice de Bunsen
Colonel Sir Douglas Dawson	Admiral Hon. Sir Stanley Colville

Hon. Henry Stonor

The Lord Steward

Major-General Geoffrey Feilding

ENTRANCE.

ンノート殿下、アンプトヒル夫人、海軍大將ミルフォード、ハーヴェン侯爵と爲す。其他召に應して殿に陞り桌に就く者數十人。朗として列眉の如し。

皇帝は燕尾服を服して。胸に我大勲位の綬章を懸けたまひ。皇后宮は淺綠色の衣を衣て。眞珠連綴の頸環を環し。爛石巨珠の冠を冠したまひ。左盼右顧したまふ毎に。光輝燦爛として。自ら淸香あり。

奏樂の間に。宮丁深紅の絨衣を衣。純白の靴襪を穿ち。擔如として徘徊し。以て周旋給事す。穆穆の宮殿。肅肅の班列。宮嬡淑女の窈窕。大官貴介の儀容。善を盡し美を盡さゝるはなし。而して奏樂は則ち渢渢乎として大國の音を表し。豐膳術術として。亦皆珍羞ならさるは無く。人をして大英王國皇室の稜威富有及其國礎の根柢

鞏固にして碩大なるを嗟嘆せしむ。

竊に思ふに。近古三百年來。西班牙倒れ。葡萄牙衰へ。英國代りて海上の覇權を握り。五大洲に睥睨し。文化未開の民を討伐し。輿衆未知の沃土を版圖とし。財を積み富を累ね以て今に至る。乃ち本夕の豪華は。之が縮圖たり結晶たりと謂ふへし。然れとも又思ふに。是れ皆名將勇士力戰健闘の賜ものに係り。而して子孫能く祖先の酸辛を忘れす。志操堅確。繼紹して且恢弘せしの致す所。吾人徒らに之を歆羨せす。宜しく其堅確の志操を取り。以て楷模と爲すへきなり。

又思ふに。嚮きに大亂の未た興らさるや。英國人民。文恬武嬉。漸く泰平に慣れ。奢侈に流れ。怠傲性を成さんとす。一旦亂興り。擧國奮起して難に當るや。其狀猶ほ狻猊の睡眠より醒むるか如く。以て

獨墺諸軍に抗して。之を掃蕩せんとす。乃ち方今の大亂は。英國に在りては。將に倒れんとするの狂瀾を回へし。衰へんと欲するの國勢を張るものにして。蘇生延壽の藥石と謂ふも不可なきなり。但知らす方今の大亂にして終らは。我帝國の如きは。其獲る所果して幾許そやと。胸中感慨自ら禁せさるものあり。

又曾て聞く。英國皇帝英明。亂興るに及ひて。身親ら範を垂れ儀を示し。以て國民を振作したまふこと。一にして足らす。乃ち工場を巡り。病院を訪ひ。軍營に臨み。戰線に抵り。御膳を減して窮乏を救ひ。飲酒の弊を知りて。先つ之を宮中に禁したまふ。今夕の高宴の如きも。亦清酒を用ひたまはす。其叡慮の廣遠なるを拜せは。一觥の水も。却て千百斛の芳醇に優るものあるを覺ゆ。

此の間珍羞次を以て至り。主賓談笑し。和氣雍雍。滿殿春を生す。

ンノート妃殿下。余の左傍に在します。因て夫君殿下我國に來りたまひし時の事を啓す。右傍はジョアン、マルホランド夫人にして。メリー内親王の御用掛たり。ジョアン夫人戰爭の終期を問ふ。余戯れて曰く。其れクリスマス前に在らんかと。夫人終に首肯せす。而して圖らさりき未た浹旬ならすして。早く已に休戰に至らんとは。

宴既に闋り。轉して別室に造る。皇帝喫烟席に於て。親王以下内外賓客を延見し。佇立閑談したまふ。擧止極めて簡易にして。左右に一侍臣なし。皇后宮、内親王、王妃等も亦婦人席に退きたまひ。賓客の候するあれは。則ち延見應酬したまふ。

余は喫烟席に於て御座に咫尺し。文武大官と談話す。傍に生平景仰する所のロバートソン將軍あり。將軍容貌魁岸。而して溫容人

に接す。余の肩を撫して曰く。方今の戰爭は。凡百の規模大ならさるはなし。一戰既に數月を要し。巨額の軍須を費し。死傷數十萬人。而して今後の大戰は。更に大なる計畫を要せんのみと。顧ふに此の如き大規模の戰爭を爲し。以て勝利を得んと欲せは。將軍其人の如き偉材を待たさるへからさるなり。余又頃日獨軍不振の事由を問へは。將軍輙ち曰く。獨軍の敗績するは。一に國力の耗散に之れ由れり。乃ち軍馬の如きも。近日太たしく其數を減せりと聞くと。又コンノート太公は。豁達高尙。風神自ら秀てたまひ。之れに接すれは。人をして自ら敬慕せしむ。

既にして余亦侍從の介する所と爲り。婦人席に候して。皇后宮に見ゆ。皇后優旨を賜ひて曰く。卿は始めて我英國に來りしやと。余對へて言す。外臣實に再來にして。往年來遊の時は。貴國の軍に從

ひて出征し。親しく其驍勇の狀を目し。又躬ら巨彈を發射し。飛行機に搭乘せりと。皇后乃ち嫣然として笑を帶ひたまふ。

皇帝皇后餐後。賓客を延見して應酬したまふこと。幾んと一時間餘に亘る。寔に恐懼に堪へさるものあり。皇帝皇后退御したまふに迨ひ。一行亦退き出つ。旅館に歸れは。既に十時三十分なり。

倫敦淹留（其三）

三十日。午前十一時半コンノート殿下以下接伴員の東道を以て。バッキンガム宮を出て丶。自動車數輛を聯ね。赴きてオルダーショットの野營地を觀る。オルダーショットは。倫敦を距ること三十哩許に在り。其地頗る曠廓濶大なり。是日天澄み風寒く。矚目明靚。神氣清快なり。

既に野營地に抵れは。國防軍司令官ロバートソン大將は。幕僚を帥ゐて郊迎し。徑ちに練兵所に嚮導す。造り觀れは。會、信號兵の演習を爲すあり。モールス符を以て回光通信及標旗信號を爲す。標旗の一面に。三色の迷彩を施きしか如きは。頗る新機軸と謂ふへし。

轉して丘阜に登る。附近の平原。悉く雙眸に入る。乍にして歩兵斥

候の一群。地隙に沿ひ灌莽を穿ちて。敵の機關銃座を襲擊す。敵は地形に據り。巧に機關銃を蔽匿す。斥候は唯爆聲の發する所を偵して。密に之に近つく。其攻守の狀。眞に輓近實戰の光景に彷彿たり。謂はゆる粗開戰鬪及紛戰の趨向を壯丁に教へて。之を練習せしむるなり。其用意頗る觀るへし。

既にして親王及隨員の一半は。オルダーショット軍司令官官舍に於て。一半は附近の將校集會所に於て午餐す。

午後體操學校を巡檢し。又補充大隊の分列行進を觀る。體操學校は。各隊の其技に適するものを簡拔糾合し。之に體操劍術を教授し。業成れは則ち隊に返して教官たらしむるなり。各種科目中。特に塹壕戰と銃劍術とを湊合混一し。以て近今の實戰に適應する戰技に熟せしむるか如き。亦取りて以て參考に資するに足る。

其分列行進せし補充大隊は。近日戰地に派遣せらるへき者にして。其壯丁體質の率ね牢良たるは。云ふ此れ男子最後の召集にして。大抵巡査坑夫より徵募せしものに係れりと。薄暮此を去り倫敦に返る。

是夜井上侯爵、柴小栗二中將、南鄉御附武官及余親王に從ひて。外務大臣の招きに應し。赴きて晚餐の饗を受く。會、外務大臣巴里に如き。會議に列す。故に外務次官ロード、ロバート、セシル代りて主人と爲る。卓に卽くに及ひて。スマッツ將軍余の左に在り。將軍は南阿弗利加ボーアの產にして。亂興りし後。南阿の獨逸領域を攻略し。戰功あり。擢てられて戰時內閣大臣五員の一に列し。現今樞機に參し。籌策を畫す。其人溫粹謙和。英語を以て款話し。音吐頗る明白流暢たり。將軍の左は。高僧アーチ、ビショップにして。カンタ

ベリー大僧正たり。其位清貴にして。班皇族に準し。高年頽齢。龐眉檐の如く。鵠髪鶴に類し。仙骨童顔。望みて有徳の人たるを知る。其他サルスベリー侯爵、レヴェルストーク卿、大法官、倫敦市長以下名人碩士多く。極めて清雅の宴たり。

倫敦淹留（其四）

三十一日。霽。後微雨。天長節たり。バッキンガム宮に詣り。始めて土國の降を乞ひしを耳く。人皆喜色あり。

午前十時三十分親王我大使館に臨みたまひ。隨員亦皆集る。親王邦人の倫敦に僑寓し本日來り賀するものを延きて。謁を賜ひ。以て佳節を祝したまふ。親王の宮を出てたまふや。駟馬の車に駕し。緋服を服せし者之か御と爲り。儀觀頗る偉然たり。

是日コンノート太公の邸第に於て午餐あり。主賓合して二十有餘人。亦清雅の讌と爲す。中にキース提督あり。往日オステント强襲閉塞の際。總指揮官と爲り。武動赫奕。聲名遠く馳す。今親しく之に接するに。溫厚寡默。容貌却て婦人の如し。其れ亦留侯一輩の人ならん歟。

午後三時親王近郊ビギン、ヒルの飛行場に莅み。飛行機隊を台覽したまふ。蓋し飛行機は。亂興るに迨ひ。進歩特に著しく。精鋭日に加はる。而して今日を以て。往年余英軍に從ひし時に比すれは。更に。斬新巧緻の域に達せるを見る。場中飛行機數十臺。翼を斂めて堵列す。其最大なるものは。五百馬力を有し。壮者十二人を載すと云ふ。

既にして飛行始り。空中戰鬪を演出す。一陟一降上下に盤回し。一徂一來左右に旋轉し。或は數機聯綴して天半を翺翔し。或は首尾呼應して蛇陣を作爲し。乍ちにして過雁秋江を渡るの勢を示し。乍にして落花春風に舞ふの姿を現し。其尤巧なるに至りては。則ち數機合翼し。宛も一機の如く。以て縱横豨突す。其妙技奇術人をして應接暇あらす。覺えす嘆賞措かさらしむ。既に畢る。各飛行機

ビギン、ヒル飛行場台臨

天の一方に於て。隊伍を整齊し。徐ろに台座の上に來りて。分列飛行す。台座を過くる毎に。嚮導飛行機潜空一過し。以て敬意を表して去る。其動作良に精妙なり。」轉して本場の一隅に抵り。自動戰車を觀る。其高九尺許。長一丈二尺許。錬鋼を以て甲と爲し。中に機關銃を備ふ。余等試乘して發軔す。輪轉し響發するに迨ひて。

緩走徐行。地物を踰へ。阜垤に隮り。榛莽沮洳を經過すること。縱橫自在。猶ほ坦途を行くか如し。亦是れ亂後に啓發せし塹壕戰武器の尤なるものとす。

觀閲り。親王舍に卽き小憩したまふ。此間余松平子爵と偕に人の勸むる所と爲り。試みに飛行機に乘し。暮雲蒼靄を穿ちて。窈渺の天半を往反す。逸氣碧空を貫くの感あり。

是夜珍田駐英大使主人と爲り。ホテル、クラリヂェスに於て。晩餐の盛宴を張り。天長の佳節を賀し。親王及コンノート殿下を正賓と爲し。內外各國の貴紳名士百數十名を招きて之を豐饗す。

宴酣にして。ロード、ロバート、セシルは席を起ちて。頌詞を呈し。日英交態の親善なるを稱し。我　皇上及英國皇帝の萬壽無疆を祝す。珍田大使亦徐ろに起ち。英語を以て本夕亘多羣賢の光臨ありしを謝し。幷せて兩國締盟の鞏固なるを祝し。以て之に對ふ。俊彝滔滔。滿堂爲めに肅然たり。

倫敦淹留（其五）

十一月一日。霽。午前十時親王郊外シェファーズ、ブッシの陸軍病院に造り。兵士の創を被り及病に罹れる者を台問し。且戰時衛生の施設を台覽したまふ。

本病院は。葡萄牙廢王エンマニュエルを推して名譽院長と爲す。其兵士を療養するに。主として體操按摩諸術を用ひ。以て身體を彊健ならしめ。旁ら兵士の人と爲りを鑑し。其所長を觀て業を授く。而して院內百端の設備。完整周洽し。取り用ひて參考と爲すへきもの多し。

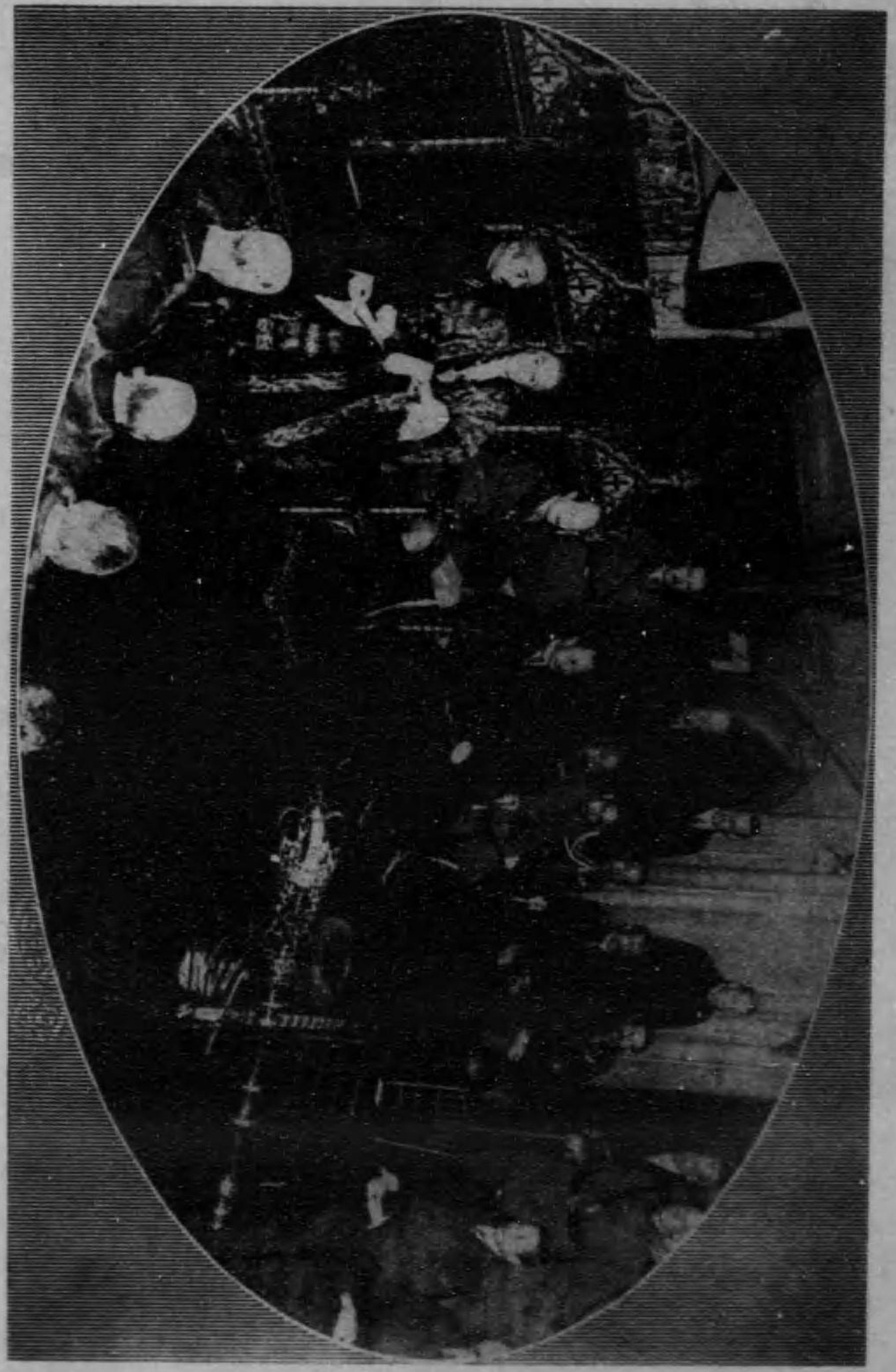
午後零時四十五分。倫敦市民公式を以て親王以下をギルド、ホールに拜請す。親王之に臨みたまひ。隨員亦皆從ふ。鹵簿轔轔として進み。街衢過くる所。士女充塡し。宛も牆堵の如し。

既に達すれは。倫敦市長、市會議長等市の名士多く集り。飾る所の彩旗。風を含みて翻翻搖搖たり。名士皆起席して。親王を拜迎す。市長乃ち親王及コンノート殿下を正席に導き。自ら其中央に坐す。其他主賓皆席に卽く。親王の右隣を珍田大使、柴中將及余と爲し。之に隣して兩宮軍醫大監、山縣少佐、バルトニー中將、カスト侍從と爲し。コンノート殿下の左隣を。井上侯爵、小栗中將、松平子爵、南鄕大佐、高橋宮內事務官、ベンブローク伯爵と爲す。市長等故典に據り。故式の服を着け。而して台座前の案上には。長劍華矛を飾り。其儀頗る莊重とす。

既にして市長起立し。歡迎辭を朗誦す。其大旨に謂ふ。親王の勅を奉して。行程萬里波濤を淩き。遙に我英國に臨みたまひしは。寔に慶する所なり。兩國交誼の親善なるは。深く賀する所なり。而して

露光量違いの為重複撮影

（英國雜誌所載）



ギルドホール歡迎式典

日本帝國の我聯合國に參與して兵を出せしは。其義勇尤謝する所なり。日本皇帝の我英國皇帝に元帥號を贈りたまひ。又我コンノート殿下嚮きに日本國に於て。朝野の歡迎する所と爲りたまひしは。深く悦ふ所なり。日本皇室の繁榮及國家の盛昌は。我倫敦市民の衷心祈る所なりと。

親王亦起立して。答辭を朗誦したまふ。一老記室あり。鞠躬如として。台前に進み。市の歡迎辭親王の答辭を并錄して。市史に載すへしと宣す。是に於て。市長朗誦せし歡迎辭及金函一盒を捧呈す。式畢る。親王乃ち鹵簿整肅。市長の官邸に踵りたまふ。市民の邸前に雲集する者。亦牆堵の如く。歡呼の聲天に震ふ。

親王邸前整列の儀仗兵を閱し。入りて午餐に列したまふ。本館構築。亦豐敞にして寛綽なり。各國の旌旗を懸け。軍樂を奏し。中外名

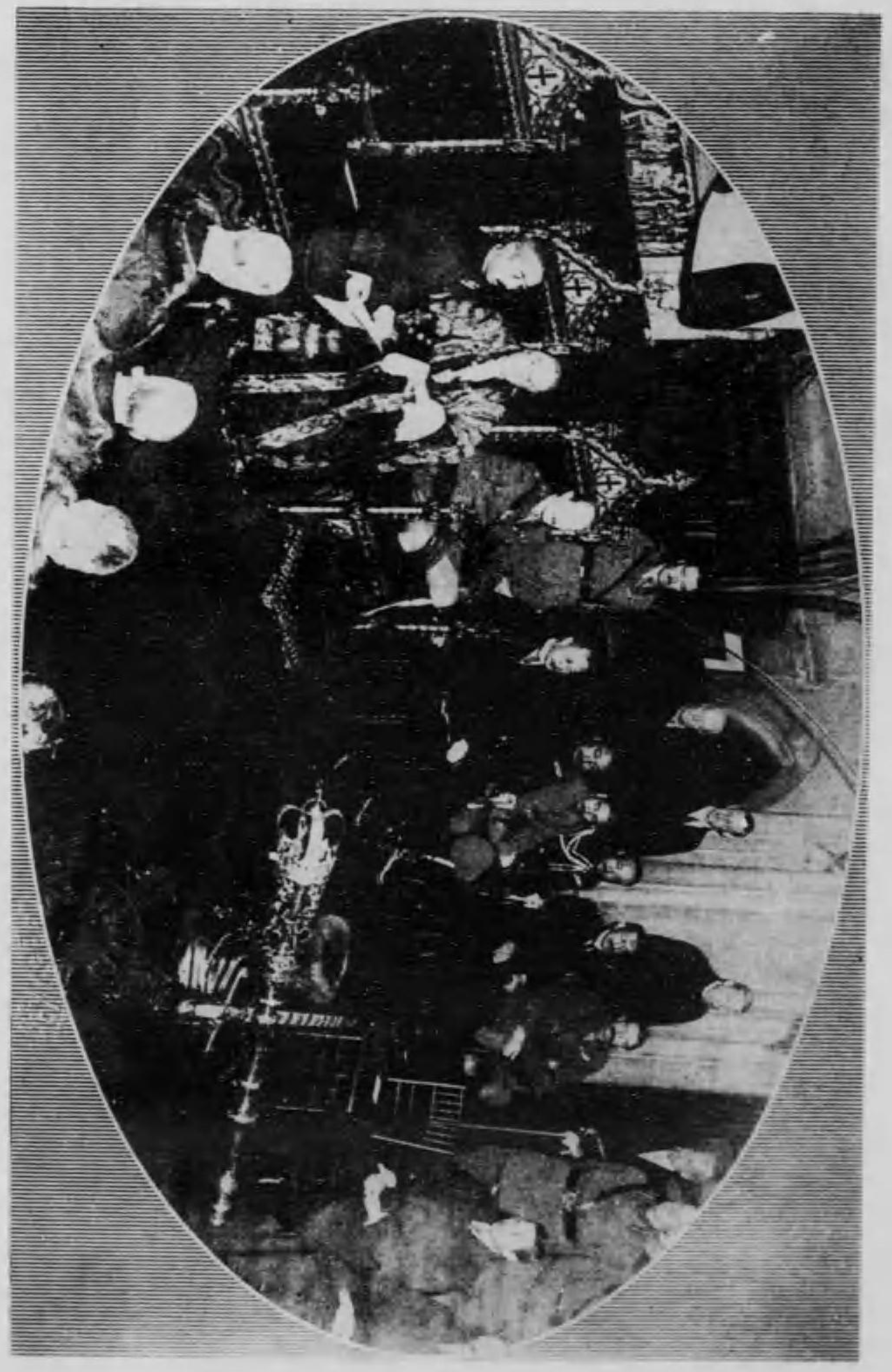
露光量違いの為重複撮影

日本帝國の我聯合國に參與して兵を出せしは。其義勇尤謝する所なり。日本皇帝の我英國皇帝に元帥號を贈りたまひ。又我コンノート殿下嚮きに日本國に於て。朝野の歡迎する所と爲りたまひしは。深く悦ふ所なり。日本皇室の繁榮及國家の盛昌は。我倫敦市民の衷心祈る所なりと。

親王亦起立して。答辭を朗誦したまふ。一老記室あり。鞠躬如として。台前に進み。市の歡迎辭親王の答辭を幷錄して。市史に載すへしと宣す。是に於て。市長朗誦せし歡迎辭及金函一盒を捧呈す。式畢る。親王乃ち鹵簿整肅。市長の官邸に蹕りたまふ。市民の邸前に雲集する者。亦牆堵の如く。歡呼の聲天に震ふ。

親王邸前整列の儀仗兵を閱し。入りて午餐に列したまふ。本館構欒。亦豐敞にして寬綽なり。各國の旌旗を懸け。軍樂を奏し。中外名

(英國雜誌所載)



ギルドホール歡迎式典

士來り會する者亡慮四百人。主賓談笑して卓に就く。極めて盛宴たり。

酒半に。市長起ちて。日英兩國皇帝陛下の萬壽を祝し。且兩國交誼の親厚。日本戰時の貢獻及親王天資の英邁にあらせたまふこと等を稱述す。淸辯流麗。纚纚として貫珠の如し。親王復起ちて。英語を以て之に答へ。且本日の高宴に招かれしを謝したまふ。

宴畢りて。親王王城に還りたまふ。時に天霽れ。夕陽赫赫として。バッキンガム宮殿を射。璨璨として人目を眩す。

此夕親王は。內閣總理大臣の晩餐に臨みたまひ。余等は接件員ベンブローク伯等に誘はれ。ホテル、カルトンに晩餐し。後アルハムブラに觀劇す。劇場の主管は。余等の來觀を多とし。特に貴賓の席を設け。飾るに日英の國旗を以てし。正面褰帳に。吾人臨觀の文字

を幻映し。以て之を觀客に介す。尋て我國歌を奏するや。滿場の士女。皆起ちて敬意を表す。

二日。霽。午前十一時松平子爵と同しく。ベンブローク伯の東道を以て。伯の所屬近衞騎兵聯隊の屯營を觀る。

本聯隊は。號してロヤル、ホールス、ガード、ブルーと稱し。兵士皆鐵驄馬に乘し。錬鋼の甲冑を擐し。白革の臂韝を着し。風骨類ね超絶俊偉と爲す。其修整端嚴の狀。徘徊顧盻の貌。勇壯にして極めて觀るへき者あり。蓋し本聯隊の將校は。之を華冑に取る。故を以て品槪自ら高きか如し。營中を巡視し。厩舍及庖厨に踵る。皆秩然として序あり。下士集會所の如きも。亦甚た完備するを觀る。

之を要するに本聯隊は。起居の設備。微、豐足に過くるに似たり。然るに亂起り軍に從ふに洎ひては。功動特に饒かに。將校を三分し。

其一は陣亡若しくは創を被れりと云ふ。謂はゆる秣を豐にし以て良駿を得るものと謂ふへし。

午後一時。コンノート殿下親王を其アッパー、グロースベナー街の第に邀へて。午餐を饗したまふ。井上侯爵、松平子爵及余從行す。禮束簡を尙ひ。靜恬舒適を主とす。王妃も亦愉色婉容閑話したまふ。餐後別室に造る。則ち我國美術品を臚陳するあり。皆今年夏殿下の携歸したまひしものに係る。就きて觀れは。殿下親しく之を指示して。深く我國に逗留し。朝野に歡迎せられしを多としたまふ。

晡時。我大使館に於て晩餐あり。井上侯爵以下各隨員及親王接伴員バルトニー中將、ベンブローク伯、サー、チャルス、カスト侍從、アーミイテージ宮內官之に列す。

十時五十五分。親王英國大艦隊（グランド・フリート）を蘇格蘭に台覽せんとし。コンノート殿下以下接伴員の東道を以て。特別列車に升り。本市イゥストン驛を發軔したまふ。小栗中將、南鄕大佐、雨宮大監、山縣少佐及余扈從す。

蘇格蘭觀艦（其二）

三日。午前八時二十分汽車蘇格蘭のダルメニーに達す。ダルメニーは。フォース河に近く。一要驛たり。

英國海軍將校艦隊より此に來りて拜迎す。乃ち其前導する所と爲り。自動車を驅ること二哩許。フォース河畔のポート、エヂアル、ポントーンに抵り。直に汽艇に乘し。淡烟輕靄を穿ちて。左右に英國艦隊を轉眄し。旗艦エリザベスに造る。

ビーティー提督舷門に立ちて拜迎す。實に是れ寰宇無雙の大艦隊を統帥するの人。吾人其名を耳にする久し。今親しく儀容に接し。覺えす崇敬の感を作す。忽にして我君ヶ代の樂作り。鏗鏗鏘鏘として。江風餘韻を含み。灝氣自ら雄俊なり。

エリザベスは排水二萬有餘噸の大戰艦にして。堅牢宇內に冠た

り。大將旗高く檣頭に翻り。猛將勇士。艦上に羅立して迎拜す。親王提督の介する所と爲り。一一之に揖したまふ。將校の風采類ね超倫整秀なり。我海軍將校數名。亦其中に在り。皆本艦隊に從軍せる者。

少時にして去り。フォース河の對岸に赴き。海軍船渠を見る。初め大亂の未た興らさるや。英國此地を以て艦隊の根據と爲さんと欲し。起工して船渠を作る。亂興るに迨ひて。益〃船渠の缺く可らさるを知り。日夕督責し

ビーティー提督旗艦上

て。終に能く竣工し。今や大小軍艦の入りて修繕に就く者。赭腹を露して横臥し。鉗鎚の音。調調丁丁たり。導者一小戰艦の乾渠內に在るものを指示して曰く。此れ是れ弩級戰艦の鼻祖ドレッドノートなりと。蓋し世界海軍史上珍重すへき者とす。

轉して埠頭繫く所の潛水艇を觀る。排水一千九百噸。形巨にして構造極めて斬新なり。一靑年將校の解疏に賴り。粗〃機關設備の梗概を知る。

午後零時五十分。戰艦ヘルキユールスに踵る。是を英國第四戰隊の旗艦とす。是時親王及コンノート殿下以下を分ちて。ＡＢの二件と爲し。親王、コンノート殿下、小栗中將、南鄉大佐、チャーレス侍從及余をＡ件と爲し。本艦に留り。餘をＢ件と爲し。第二戰隊旗艦

に赴くものとす。乃ちA件は提督ブローニングの享する所となり午餐して。B件は第二戰隊旗艦に於て之を爲すなり。

二時十五分。去りてフォース河南崖ポート、エヂアルに抵り。埠頭附近に繫留する所のV型驅逐艦を視る。蓋し驅逐艦も亦亂興るに際し。之を構造する術に於て。大に啓發する所あり。其斬新なる者は。形狀容量及百爾の武裝。往日の巡洋艦を陵き。其再昨年の製に係るもの。既に已に舊型に屬すと云ふ。

三時三十分フォース河を下れは。乍にして一大鐵橋の虹の如く天を摩して高く空に横はるを見る。其色烏黑。是をフォース橋とす。橋の下流を。英國巡洋戰艦隊及米國遣歐艦隊停泊の所と爲す。眸を放ては。英米二國の艨艟齊首駢列し。輕嵐薄霧の掩ふ所と爲り。其狀宛も雙龍の蜿蜿蟠蟠たるか如く。雄風堂堂たり。

英國巡洋戰艦隊の旗艦ライオンに踵れは。提督バケナム中將は舷門に立ちて。親王を拜迎す。其軀幹修頎にして。儀表挺然たり。乃ち君ヶ代の樂を奏し。一齊迎拜の後。台座を甲板に設け。親王を導き。全艦員をして序を追ひ台前を過き。敬禮を爲さしむ。用意頗る鄭重なり。側に聞く提督は。天資高潔にして。英國紳士の儀型を以て目せられ。部下大に之に服すと。又聞く提督は。日露の役。征に我軍に從ひ。深く我の所長を知りて。之に推服す。乃ち其日日晨起。部下を勗勵するか如きも。蓋し我に倣ひし者。夫れ此の如し。故に極めて我に厚情を表し。我海軍の將校を視ること。猶ほ其愛子の如しと。

艦兵を閱するの後。本艦搭載の飛行機をして飛揚せしめ。以て台覽に供ふ。初めは則ち爆聲砰然として耳に徹し。其響聯聯已ます。

良久うして。機悠然として翼を張り升騰す。乍にして風を銜きて碧天に飄舞し。周旋以て圏を畫くこと數次。少頃首を轉して艦に返り。翼を斜にして旗檣と檣索との間を過ぎ。復冲擧跼蹐す。其狀眞に鷙鳥の颶風に駕するか如く。巧至り妙至る。片鱗を覩て完龍を知り。一斑を闚ふて全豹を識るとは。余英國艦隊に於て乎之を見る。

其他砲塔司令塔の如き。其機關應に容易に外人に示さゝるへきものをも。亦親ら導きて之を縦觀せしむ。謂はゆる赤心を人の腹中に推すもの。良に感すへし。

去りて米國艦隊の旗艦ニューヨークに踵る。司令官ロッドマン亦親王を迎へて。艦內を台覽に供す。其要樞の所は。皆之を避けて。機に庖厨、理髮舍、機關室、海兵屯集所等に導き。轉して司令官房に延きて。茗餻を供す。英米兩國我を待つ。相異ること此の如し。以て此の間の消息を知るへし。

五時三十分。去りて登陸し。汽車に入りて小憩す。八時A件は汽艇を駛せ。復旗艦エリザベスにビーティー提督の晩餐に赴く。時正に初更。星斗闌干として森布し。艨艟數十艘。燈を滅して暗中に齒列し。其狀山岳の如く。岡阜の如し。中に厖大特に群を抜く者。卽ちエリザベスたり。既に舷門に升れは。ビーティー提督は。慇懃に親王以下を邀へ。奏樂の間に。一齊食卓に卽く。

嗚呼今や吾人は巍巍の艦隊を過ぎ。峩峩の旗艦に升り。闔國の人景仰して以て護國神と爲す所の曠世の偉人と欵晤するなり。僂指すれは開戰既に四年有半。獨逸の炎氛。漸く將に熄えんとす。彼若し掉尾の快擧を爲し。鋒鋩を既衰に回さんと欲せは。今日の勢。

惟其愛惜深藏する所の艦隊を出し。我と輸贏を決するの一策あるのみ。北海雲濤漠漠。殺氣横溢し。寸毫の清晏を見す。而して提督態度極めて從容。戰爭と相關せさるか如し。乃ち試に獨逸艦隊出動の所見を叩けは。提督莞爾として笑ひて曰く。冀くは君渠を催して。形を外海に現せしめよと。洒洒落落たり。此時會。澳國乞降の報至る。滿室惟然たり。

宴半にして。提督起ちて我　天皇陛下の萬歳を唱へ。親王も亦起ちて英國皇帝の萬壽を祝したまふ。

旣にして提督復起ちて。其所感を述へて謂ふ。親王の萬里遠來したまひて。一路平安なりしは。賀すへし。日英同盟の親厚なるは。喜ふへし。日本艦隊の聯合軍の爲め力を效せるは。欣ふへし。今夕親王の玉趾を擧けて弊艦に臨みたまひしは。謝すへしと。更に詞鋒を進めて謂ふ。吾敬愛する所の日本少壯士官等。軍に吾艦隊に從ひ。ジャットランドの海戰に隕命せしは。洵に哀悼に堪へさるなり。然れとも忠肝義膽。聲名千古に傳へて。眞に不朽なり。冀くは方來兩國の交誼。彌〻加〻親厚ならんことをと。意氣頗る發越せり。

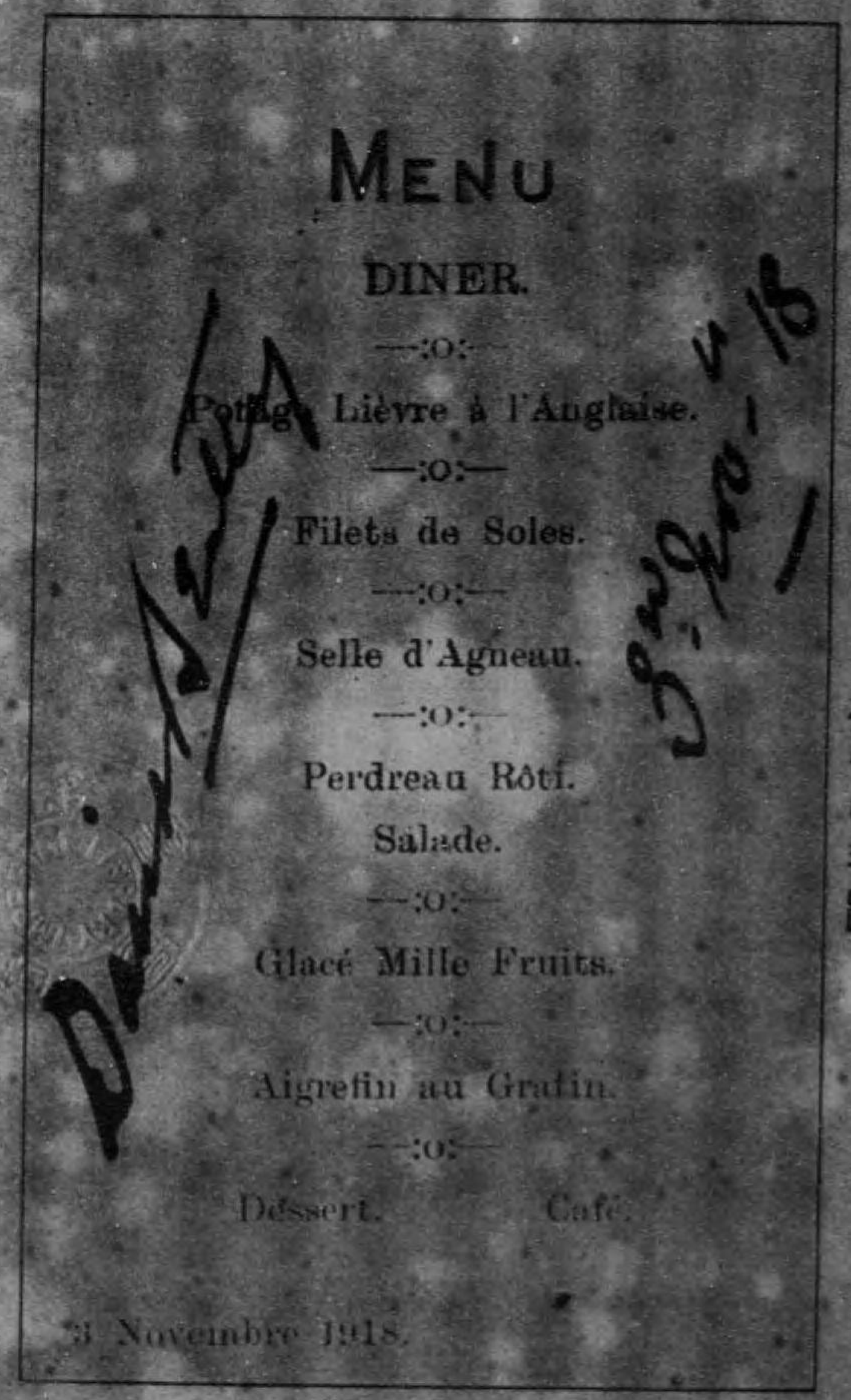
提督年齒未た五十に達せす。而して宇內に雄視する艦隊に長とし。英姿颯爽。辭旨明白。蓋し亦麟閣に畫くへきの人ならん。

親王乃ち起ちて英語之に答へたまふ。其大旨に謂ふ。

ダビット、ビーティー閣下。予は閣下か今夕鄭重懇摯なる盛宴を張り。且予か爲めに賀詞を述へらるゝに對し。深く感悅の意を表す。

予今日親しく閣下か統帥せらるゝ雄大の貴艦隊を訪問し。麾下勇武の將士及合衆國將士と相會するを得しは。予の怡懌禁

露光量違いの為重複撮影



英國聯合艦隊司令官ビーティー提督の手蹟

する能はさる所とす。

予は爰に海軍武官の分を以て。切に貴聯合大艦隊の前途を祝福し。併せて赫赫の成功あらんことを祈る

と。和氣陶陶裏に。晩餐を畢へり。喫烟室に入り。閑談良久うし。十時謝して去り。宮廷車室に返り宿す。

露光量違いの為重複撮影

MENU

DINER.

Potage Lièvre à l'Anglaise.

Filets de Soles.

Selle d'Agneau.

Perdreau Rôti.

Salade.

Glacé Mille Fruits.

Aigrefin au Gratin.

Dessert. Café.

3 Novembre 1918.

英國聯合艦隊司令官ビーティー提督の手蹟

する能はさる所とす。

予は爰に海軍武官の分を以て。切に貴聯合大艦隊の前途を祝福し。併せて赫赫の成功あらんことを祈る

と。和氣陶陶裏に。晩餐を畢へり。喫烟室に入り。閑談良〻久うし。十時謝して去り。宮廷車室に返り宿す。

蘇格蘭觀艦（其二）

四日。旗艦エリザベスに於て。聯合大艦隊の各艦長以上、日本及同盟國海軍從征武官、日本動章佩用者會同し。親王を拜請せり。親王臨みたまひ。隨員從ふ。中甲板に於て。親王手つからビーティー提督麾下の提督及上班將校に動章を贈りたまふ。

式畢り。驅逐艦オークに轉乘して。大英國聯合艦隊を觀艦したまふ。會〻天陰り雨降り。煙霧濛濛たり。

艨艟のフォース河に停泊する者亡慮百數十艘。而して艦隊の主力は。フォース橋の上游に居り。輕艦小艇周りて之を護し。巡洋戰艦及米國艦隊は。橋の下流に居り。亦砲艇快舸之を護し。共に出戰準備の態勢を持す。

乃ち前みて下流の巡洋戰艦を觀艦す。オークの過くる所。君ヶ代の

樂作り。毎艦の水兵。登舷して敬意を表す。而して艦隊の列を作すや。緜緜相連り。其遠きに在る者は。煙霧冥冥中に。浮影の微搖するを睇。近きに在る者は。則ち威容堂堂。城の如く山の如し。轉して橋の上游に溯る。時に大雨沛然として至り。面に灑き衣を濡し。殆んと甲板に凝佇するに堪へす。而して各艦皆登舷の禮を爲し。船員通身淋漓として。直立不動。以てオークを目送目迎し。却て一段の壯觀を加ふ。

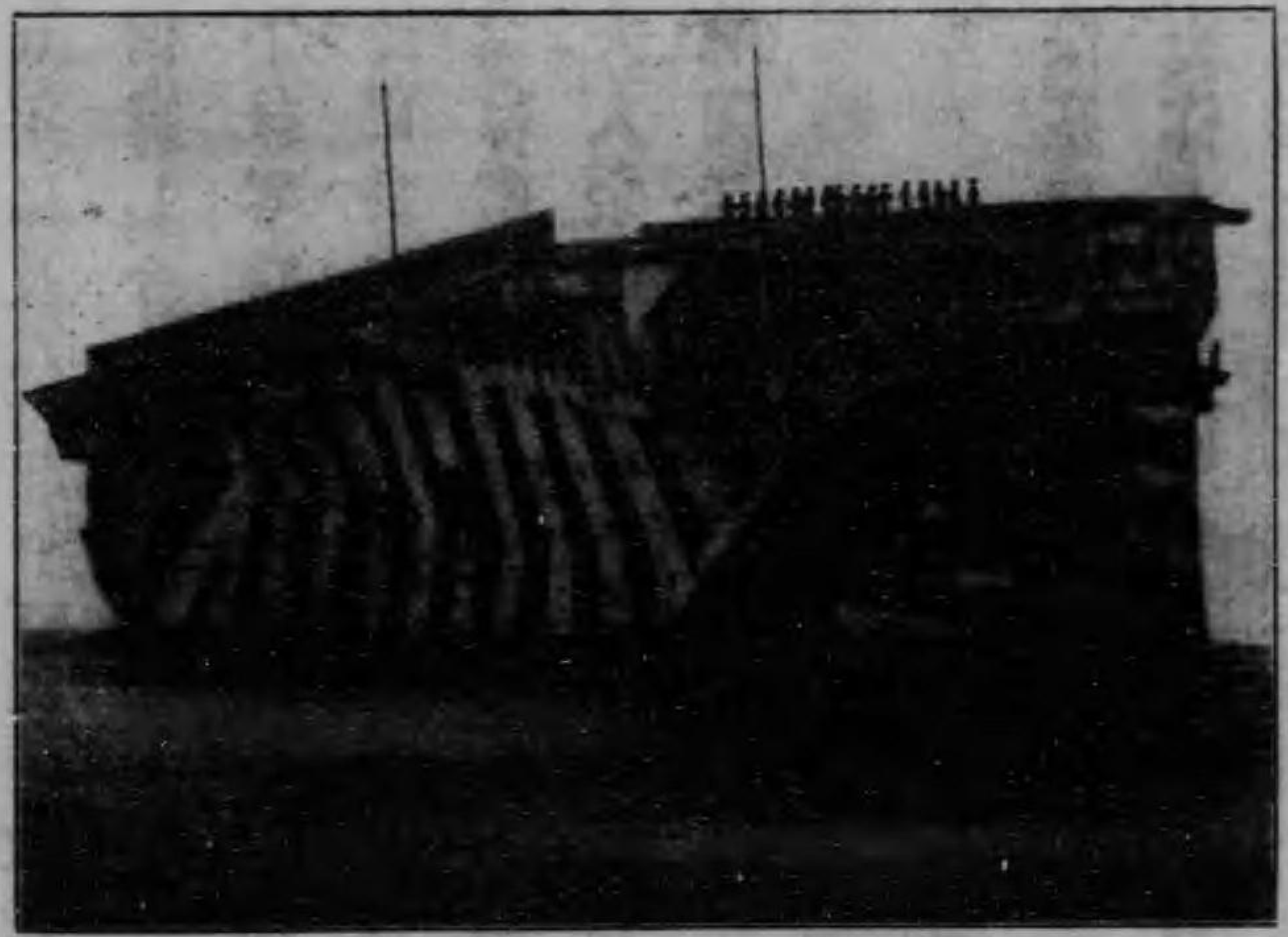
艦隊を通觀するか爲め。フォース河を上下すること。十數海里たり。聞く本艦隊戰に莅み。縱列蛇陣を布けは。長六十海里に達し。而して之を作すに。三時間を要すと。以て其雄偉を知るへし。而して吾人今や雙眸に如是雄偉の一大水師を收む。何等の快絶壯絶そ。又聞く艦隊は。目下四時間警急の配備を爲すと。夫れ亂興り既に五年に及ひ。目に一隻の敵艦を睇す。浮家泛宅。淡泊無味の海上に僑寓し。今に迄りて士氣猶ほ奮興衰へさるは。洵に感すへし。

午後零時四十分。蘇格蘭沿海守備司令官海軍大將バルニーの官邸に於て午餐す。官邸はフォース河北崖の崇岡に在り。窓櫺に立ては艦隊下に列し。亦一偉觀たり。食卓に卽けは。ビーティー提督夫人余に隣せり。風丰婉約。言語清靜。獨逸艦隊の出動を題とし。應酬閑話す。

二時三十分謝し去る。是時雨始めて霽る。往きて巡洋戰艦カーレヂアスを觀る。艦の長さ八百尺。各砲塔に巨砲三門を收め。速力駿快。寔に此種艦中奇異の者とし。列國無雙と稱す。其特に此種の艦を作りて。實戰に試みんと欲す。英國の敏思奇創驚く可し。其司令塔甚た崇く。登りて頫瞰すれは。甲板の人は。幾んと豆の如く蟻の

如し。製艦の技の競進する。眞に駭愕に堪へさるなり。

轉してアーガスを觀る。アーガスは。飛行機を載せて游航するを主とし。十餘日前。始めて竣工せし者とす。甲板に檣柱無く。煙突無く。砲塔無く。司令塔無し。其狀渾沌として鷄子の如く。一物の眸子を障る無し。蓋し飛行機甲板に降下するに當り。物の之を遮らんことを恐れてなり。然れとも通信柱及司令塔の如きは。艦上必す缺く可らす。



奇艦アーガス

故に之を艦體の內に藏し。機を設けて升降出沒せしめ。煙突の如きは。甲板に竪立せしめす。之を艦尾に橫出せしめ。以て自由に煤煙を吐かしむ。而して砲塔は之を舷側に備ふ。本艦に飛行機大約二十臺を載せ。之を艙裏に藏し。昇降機を以て出納す。又甲板に繩索數十を張り。以て飛行機歸來の時。鈎して之を攫むに便す。本艦は施くに迷彩を以てし。速力二十一海里。以て艦隊に尾する者とす。

此等斬新奇異の諸艦は。皆亂興るに及ひて。始めて覃精研思。以て創造せしもの。而して今畢く之を台覽に供し。毫も秘惜の色なし。英國の雅懷大度。亦感すへし。

更に往きてフェリアスを觀る。亦長大の巡洋戰艦にして。檣柱煙突各〻一を有し。而して飛行機發着の設備あり。蓋しアーガス號と

巡洋戰艦とを折衷せしものなり。客室に於て茶菓を享せらる。此間活動寫眞を作し。アーガス號上飛行機昇降の光景を映出す。先つ實際を觀て。而して更に寫眞に於て委曲を知る。鈍根椎魯と雖も。安そ憬爾として瞭悟せさるを得んや。

夕嵐河を鎖すに比ひ。提督以下の厚待を謝し。別を告け。輕艇に乘し陸に向へは。夕陽雲間より漏れて。斜に河水を照し。長橋巨艦。愉悦として皆別を惜むか如し。既にして宮廷列車に還る。六時ビーティー提督は。一將校を從へ。來りて親王の台臨を謝し。敬意を表して去る。既にして發軔し。蘇格蘭二日觀艦の殘夢を挂けて。倫敦に返る。

英佛海峽航過

五日。霽。午前八時二十分倫敦に達す。井上侯爵。柴中將奉迎す。松平子爵、高橋宮內事務官は時疫に嬰り臥蓐す。故を以て來る能はす。」本日台駕英國を去りて。佛國に赴きたまふ。十一時隨員相伴ひ。バッキンガム宮に朝し。拜別の意を上る。

午後二時。一行ヴィクトリア驛を發し。佛國に向ふ。但。松平子爵、高橋事務官は。猶ほ留りて病の痊ゆるを待つ。驛に踵れは。遍く緋氈を布き。以て大賓を敬し。殷紅目に映す。コンノート殿下は。ペンブローク伯爵、シンクレーヤ大尉を從へて來り送りたまひ。皇帝陛下も亦車駕親しく驛に臨みて送り。親王と握手したまひ。隨員にも握手の禮を賜ふ。其他貴紳及珍田大使以下。邦人來りて拜送する者多し。

既に發靭し。田園冬日の風光を遙矚し。三時四十分フォルクストンに抵る。珍田大使、田中少將、濱野海軍中佐（英次郎）拜別して去る。四時乘船して海峽を逾ゆ。英國の驅逐艦隨ひて船側を護し。飛行機飛冲して船上を警す。

一路恬靜。六時佛國ブローニュ埠頭に達す。英佛二國の兵。整列捧銃し。軍樂作り。先つ君ヶ代の曲を奏し。尋て英佛二國の樂曲を奏す。親王二國の兵を閱したまひて後。佛國政府特派の汽車に乘したまふ。松井駐佛特命全權大使（慶四郎）、永井陸軍大使館附武官（菊男）及佛國陸海軍將校數名來りて拜迎す。

車中晩餐し。十一時佛都巴里に入り。自動車に轉乘し。掩燈黑暗の街衢を馳せ。ホテル、クリヨンに造り宿す。倫敦及巴里の暮夜燈を掩ふは。獨軍飛行機の來襲を避くるか爲めなり。

巴里淹留

六日。雨。午前十一時。佛國駐在の我陸海軍武官及大使館官僚旅館に候して。親王に拜謁す。

午後零時三十分。親王以下往きて佛國大統領ポアンカレーを訪ひ。其官邸に於て午餐の饗を受く。來會して卓に卽く者。大統領及其夫人並に外務大臣、參謀次長等文武高紳數十名とす。余の左班に。一老將軍有り。將軍余に語りて謂ふ。貴國明治の初。西洋兵式を採用し。主として我佛國に摹倣せり。爾時余教官と爲り。貴國に僑寓せりと。又謂ふ　明治天皇の崩したまふや。余簡はれて特派使節と爲り。貴國に之き奉弔せり。時鍋島侯爵の邸第。特使の旅館たり。余客寓旬日に亘れりと。將軍は實にルボン中將たり。

三時歸館す。少閑を得。山縣少佐と偕に。出てゝ巴里雨街の風光を

觀る。少佐往年留學此に在り。當時相識の佛人某。近日陣亡せるを聞き。將に往きて之を弔せんとす。余亦同伴して其居に赴く。某の母孺人。縞服して出て少佐を邀ふ。其亡兒の舊友たるを以て。且喜ひ且哀み。情態頗る慘怛たり。室に某の軍服佩劍肖照等遺愛物を陳す。孺人桌上の地圖を披き。陣亡の所を指點し。且云ふ。戰畢れは。親ら往きて之を弔せんと。涙泫然たり。時に室内寂然。玻瓈窓外。空しく雨の淅鈴たるを聽く。

吁嗟方今人家。此の如き者果して幾千萬ある。戰爭は實に人生酸鼻の極。辭して去り。華榮麗姸の街衢を過き。旅館に返れは則ち既に點燈せり。

是夜松井大使親王の台臨を仰き。又隨員を邀へ。邦風の晩膳を饗す。久しく之を口にせさるを以て。特に豐甘を覺ゆ。

戰線巡檢（其一）

七日。細雨廉纖たり。佛國政府親王及隨員に動章を贈れり。余はオフィシヱ、ド、ラ、レジヨン、ド、ノールを受く。此動章は。佛國に在りては頗る重拜たり。洵に惶慚に任へす。

午前八時四十分親王隨員を從へ。ガール、ド、ノール驛を發軫し。佛軍戰線巡檢の途に上りたまふ。

本列車は。我一行佛國淹留中。其使用に供するものと爲し。凡百設備整頓して。起臥甚た便なり。乃ち行李を二分して。一半は之を旅館に留め。一半は之を車中に携ふ。

汽車東北に向ひて駛せ。九時三十分サンリ村に停留す。サンリは極めて小驛たり。而して聯合軍總司令官佛國元帥フオシユの總司令部此に在り。要衝の大邑を避けて。特に此一閑村を卜せしは。

蓋し亦敵國飛行機の來り襲はんことを慮りしものならん。

乃ち自動車に轉乘して騖せ。頃刻にして白堊の別墅に似たるものの樹間に隱見するを覩る。自動車此に達して停る。是れを總司令部とす。陸軍幕僚數名。檐前に佇立し。莞爾として笑を含み。親王以下を邀へ。前導して客室に入る。則ち斑白の老將軍あり。溫顏手を搖かして遠來の大賓を邀ふ。是れフォシュ將軍たり。聯合軍三百萬の貔貅を指麾し。以て敵軍の鋭鋒に當り。近日に訖り。戰線到る處。洊りに敵軍を抑壓する者。是れ將軍其人に非すや。

隣室に徙るに及ひ。中央に書桌あり。側らに一大戰圖の卷軸と爲せしものを懸けたり。將軍之を手にし。且披き且卷き。親王に對し指示して。輓近の戰況を上啓し。且言す。今や我聯合軍は。到る處勝を制し。獨軍は竟に我を支ふること能はす。休戰を請ふに至る。而して軍使昨日伯林を發すと聞くと。體度寛優。悠揚迫らす。人をして敬仰已まさらしむ。

親王深く其厚意を謝し。且將軍の洪勳を頌し。聖旨を傳へて。手つから桐花大綬章を貽りたまふ。又聯合軍總參謀長ウェイガン中將に勳二等旭日重光章を。總司令部附ル、ロン少將に勳二等瑞寶章を貽りたまふ。ウェイガン中將は。開戰の初より。フォシュ將軍に隷すること。影の形に隨ふか如く。股肱と爲り。羽翼と爲り。秘策密謀。參畫せさるは莫し。其關係。猶ほ獨將ルーデンドルフの元帥ヒンデンブルクに於けるか如し。

總司令部は。秩序整齊。極めて肅靜たり。亦以て戰況の順調に在るを徵すへし。親王留りたまふこと僅に十五分。然れとも極めて多感の訪問と爲す。

サンリは。五年前獨軍始めて來寇の時。佛軍撤退終尾の戰線にして。獨軍の有に歸せしこと兩日。諸所猶ほ兵燹の痕迹を存す。十時汽車に遷り。東北を指して馳せ。既にコルレット村附近を過ぐれは。沿途概ね兵燹に罹り。人家破れ。林木燔け。道路圮壞し。田園荒蕪し。獨軍經る所備さに慘毒を極むるの狀。一一目に映す。午後零時三十分。ソワッソン驛に抵る。ソワッソンは。素と一小都府にして。人口數萬を有す。然るに久しく獨軍の有に歸し。今年八月始めて之を回復す。故を以て全市居民なく。寂寞蕭條。空しく市邑の殘骸を留むるのみ。

是に於て。自動車に遷り。往きて爭戰の故墟を觀る。駛すること十哩許。ヴェーリー附近エーン河の岸畔に抵れは。橋梁隤墜し。屈折して河に臥す。乃ち橋畔に停り。崖に立ち。佛國將校の戰話を聽く。將校は客歲躬つから此に戰鬪せし者たり。云ふ此地は。四年前霖潦大に至り。佛軍背後を斷たれ。而して前崖の第一戰線。獨軍の攻擊する所と爲り。防戰頗る力め。自後常に彼我攻奪の要衝と爲れりと。

進みて河を逾え。前崖に踵り。シュマン、デ、ダームの荒野を過ぐ。シュマン、デ、ダームは。今夏以降。聯合軍進擊し。獨軍健鬪し。激戰洊りに興りし地たり。路傍往往敵軍の折劍炸彈の飛散せるを見る。而して處處堆土上。十字架を樹て。架上に鐵盔を懸けたり。皆獨軍陣亡者の墳と爲す。又馬屍往往土上に橫臥するあり。滿目荒凉。野に青草なく。大小無數の礮彈。地上を摧剝して。尺寸の完土を餘さす。空しく羣鴉の點點として。一去一來するを看るのみ。佛國將校抗聲當日の戰況を語り。是に至り。聲涙俱に下り。殆んど情に堪へさ

るか如し。吾人且聽き且看。往復低徊。感愴殊に甚し。

シュマン、デ、ダーム附近の巡視既に畢り。更に來路に卽き。エーン河の左崖に沿ひて。東駛すること二十五哩。ランスに抵る。云はゆるランス大寺院は。市の中央に在り。獨軍の爲めに礮撃せられ。頽圮して虛洞と爲り。空しく巨柱厚礎の傾斜磊砢たるを見る。之を余往年從軍來觀の時に比すれは。頽圮更に甚し。

本寺院は。伽藍崇隆。古昔の建造に係り。精巧偉麗。雙ひ備はり兼ね賅り。美術者の取りて以て模楷典型と爲すもの。而して今や乃ち此の如し。兵禍眞に悲慘とす。蓋し本年七月十五日。獨軍大擧第五次の攻勢を取るや。振天動地。ランスは戰線廣袤二十五哩の中央と爲る。故を以て慘禍此に至れるものとす。

晡時歸路に就く。ランスとソワッソンの間に。フィム村あり。往年

從軍して此村を過き。路傍の一人家に宿す。今行行寓目すれは。家は既に破碎し。柱壁孑立し。閴として人影を見す。當時余を款待せし翁媼及少年。知らす今何に在るや。此村も亦今春獨軍の攻擊せし所に係り。慘憺殆んと覩るに堪へす。

ランスよりソワッソンに至る三十哩。疾馳して返り。列車に入りて晩餐す。桌上談する所。總て是れ戰線看過の感想に外ならす。此夜東走してヴェルダンに向ふ。

戰線巡檢（其二）

八日。曇微雨。午前八時ダグニー驛に抵り。自動車に轉乘し。ヴェルダンに赴く。尖風獵獵として。髪を櫛り肌を侵す。ムーズの谷底を過くれは。左右兩崖の丘垤上。諸所に壁壘を見る。蓋しヴェルダン要塞の支堡たり。進みて要塞に到り。城門を經て。ヴェルダン市に入る。街衢咸く兵燹に罹り。鄽舗人家。一完膚なく。復一居民を見す。坊市既に蕩滅し。但、軍需車馬の往反喧譟するあるのみ。

市を出て。進みてムーズ河を歷て。東郊に踵り。波狀濤樣の高陵に向ふ。是れを要塞の本防禦線と爲す。サン、ミシェル砲臺下を駛するに及ひて。轟然一爆。炎熛四散し。濃烟右方の灌莽より騰る。是れ聯合軍砲兵の獨軍陣地を砲擊せしなり。獨軍は今猶ほ此を距ること五六千米の所に在り。聞く米軍主として此方面に當ると。來路及ヴェルダン市に於て。多く米兵の彷徉往來せるは之か爲めなり。迂曲登躋して。陵上に到り。スーヴィール堡に達す。ヴェルダンの守將ヴァレンタン少將終始東道す。

スーヴィール堡は。ヴェルダン東北本防禦線の一壘に屬し。ヴェルダンを距ること大約五千米に在り。千九百十六年春より夏に迄り。獨軍はヴェルダンを強襲せんとし。ドゥモンを拔き。ヴォーを奪ひ。其攻城の末期に於て。將校斥候の一隊は。竟にスーヴィール堡を距ること百五十米の所に肉薄せりと云ふ。

堡上に立ちて。遙に前方を矚れは。ヴェルダン攻擊激戰の焦點と爲り。彼我兩軍敢戰苦鬪せしヴォーの堡壘は。斜に右方に偏して。相距る一里許の丘上にあり。廢殘荒餘。僅に褐色の土塊を留む。又

數々兩軍競奪争取の要衝たりしドゥモンの堡壘は。谷地を隔てゝ正面二千米の陵上に在り。濕雲低れ。淡靄鎖し。山谷冷灰。彷彿として當年の愀慘を訟ふるか如し。而して聯合軍の飛行機。堡上の天を掠めて游弋するあり。又時時砲聲の殷殷として遠雷の如きを聞く。偶々敵の一巨彈聲を發して飛來し。ヴォー堡左傍の丘上に墜爆す。濃烟土塊。升騰飛散し。光景悽愴たり。東道佛國將校中に。當時の從軍者あり。手を伸して遠近を指示し。以て其遭遇せし所を講說す。

回思するに。獨軍のヴェルダンを攻擊せるは。千九百十六年二月二十一日に發し。乾坤一擲。此一擧を以て成敗輸贏を決し。以て大戰の終局を結はんと欲し。日耳曼種族慓悍の壯丁を驅使し。攻擊三月。晝夜舍ます。獨軍喪ふ所の將卒五十有三萬。實に有史以來の大戰と爲す。今此を過くれは。滿目焦土。悲風吹き。暗雨至り。鬼哭啾啾たり。

スーヴィール堡は。今猶ほ彈痕摧剝の地層を穿ちて。依然として潛在す。ペトンの土窟を降ること十數尺。暗室に電燈を點し。戍兵の警備するを見る。而して土窟の一室に。鹵獲の武器を納む。獨軍四十二珊巨砲の斷片。亦一隅に在り。

堡壘を周觀して出て。自動車を驅り。フルーリー村に赴く。フルーリーは。スーヴィール、ドゥモン兩堡の間に介在し。曾て人家數十百戶あり。然るに今悉く巨砲の摧く所と爲り。漠として片壁隻址を存せす。一望駭愕に堪へす。車首を轉して。ヴェルダン市に返り。荒壞せる街衢を周覽し。謂はゆるヴェルダン寺院の址を過く。本寺院は。昔日善男信女の禮拜

絶えさりし處。今や化して廢墟と爲り。空しく風伯雨師の蹂躙するに任す。亦當時砲撃の太甚しかりしを想はしむ。聞く獨軍ヴェルダンを攻撃せしに當り。本市被る所の砲彈。日に三百五六十を算せりと。

市に城廓あり。築城家ボーヴァンの築きし所。城門を入れは。一隊の戍兵。軍旗を掲け樂を奏し。整列して親王を拜迎す。ヴェルダン方面佛國第二軍司令官ヒルシャウワー中將、第二軍砲兵部長ルコット少將、ヴェルダン要塞司令官ヴァレンタン少將等出てゝ邀ふ。親王閲兵し。尋て地下の穹窖に入り。勳章授與の式を擧行し。司令官ヒルシャウワーに勳一等旭日大綬章を。砲兵部長及要塞司令官に各〻勳二等旭日重光章を貽りたまふ。

穹窖内。粉壁の楣間を飾るに旌旗及胸甲矛戟を以てし。電燈燁燁

佛國ヴェルダン、スーヴィール殘壘

ヴェルダン、フレーリー村の蕪沒

として之に照映し。軍樂翕如として作り。繹如として鳴り。其聲壁に徹し。勇壯鬱勃。軍國の氣味室中に充つ。賠動後午餐し。杯を擧けて聯合軍の武功を祝し。談笑湧くか如し。

本要塞は。蓋し疇昔勝敗分岐の要樞に係り。列國擧けて焦慮駐目せし所。而して佛軍堅忍奮闘。竟に其守を完うし。今吾人此歴史的城塞の地下に於て。當日の勇將と。桌を圍みて酒を酌む。何等の快事そ。席にマルシャン中將あり。中將は昔年阿弗利加ファショダ爭奪の際。中佐を以て。瘴煙蠻雨の中に出入し。佛人をして狂奔呼快せしめ。マルシャン中佐の名。嘖嘖人の稱する所と爲る。今や中將に陞りて。ヴェルダン方面の師團長たり。而して中將は我柴將軍とは。往年北京に於て相識たり。兩將軍此に邂逅し。今昔の感に堪へさるの狀あり。

午後二時。親王謝して城を去り。ダグニーに還りたまふ。既にして汽車發軔し。スイリーに抵り。少時停留す。米軍總司令部を訪はんか爲めなり。總司令部は。スイリー驛を距ること十町計。一小村に在り。行行獨軍俘虜の一羣。路傍に服役するを睹る。既に達す。會、總司令官パーシング大將。獨軍の軍使に接するか爲め。聯合軍總司令部に赴き。第一軍司令官リジェット中將總司令官に代り出て邀へ。地圖を抜きて。戰況を上啓す。

既にして謝し去り。三時スイリーを發し。巴里に歸る。

巴里再留

獨軍今や爭戰を持久する能はす。軍使を出して休戰を乞ふ。其條章未た世に公表せすと雖も。之を獨軍降伏し聯合軍克捷せしと謂ふも。固より不可なし。巴里人士は。事に熱中し易し。乃ち競ひて戰捷を賀し。意氣天を衝く。

試みに旅館を出て、コンコルドの康衢を徙徛すれは。鹵獲の巨礟、劍銃、鐵鎧、戰車、飛行機の類。堆積布陳す。皆今夏以來略取せし者に係る。往年我國の露國に克つや。亦東京禁門前凱旋道途の兩側に。鹵獲の武具を陳列し。而して都民抃躍蹈舞す。今巴里人士は。其悅懌更に甚しきものあり。居喪寡婦の遺孤を携へ巨礟を撫し以て亡夫の壯勇を語るあり。翁媼相携へ都民の羣噪を見愛子の凱旋を遲しとするあり。而して戶戶國旗を掲けて之を祝し。男子は

露光量違いの為重複撮影

嘻嘻として阡陌を往復し。女兒は美衣華裳。通衢を徘徊し。其紛囂雜踏名狀すへからす。

蓋し大亂に際會すること。前後五年。國力を傾倒し。備さに艱辛を歷。特に今年春季以來。獨軍攻擊益〻甚しく。國家の危急なる。其勢累卵の如く。華美の巴里も。屢〻巨砲の炸爆する所と爲る。然るに邪正に抗せす。逆順に克たす。今や乾坤安定。竟に一大勝利を得。宜なる哉都民の狂氣此に至るや。

コンコルドの康衢には。種種各各の塑像羅列す。某像は某地を表し。某塑は某境を章す。千八百七十年普佛の役。佛軍敗績し。巴里城下の誓を爲し。アルサス、ローレンの腴土豐壤。普國に奪はれしより以降。佛人二州を表章するストラスブルグ及メッツの女像に服するに縞服を以てし。以て永く戰敗を記念せしむ。然るに今や

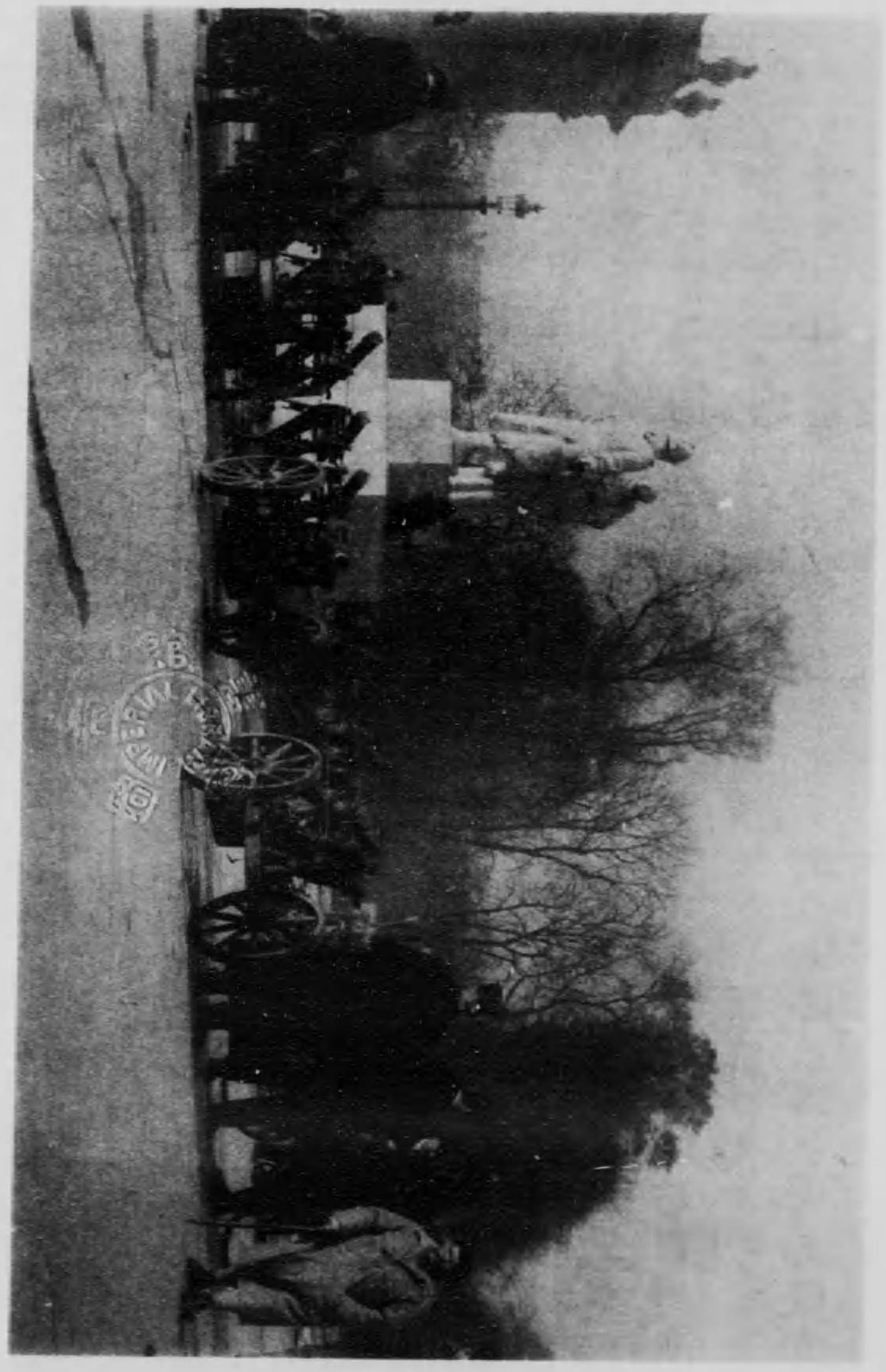
巴里の戰捷氣味

露光量違いの為重複撮影

嘻嘻として阡陌を往復し女兒は美衣華裳通衢を徘徊し其紛囂雜踏名狀すへからす

蓋し大亂に際會すること前後五年國力を傾倒し備さに艱辛を歷特に今年春季以來獨軍攻擊益甚しく國家の危急なる其勢累卵の如く華美の巴里も屢巨砲の炸爆する所と爲る然るに邪正に抗せす逆順に克たす今や乾坤安定竟に一大勝利を得宜なる哉都民の狂氣此に至るや

コンコルドの康衢には種種各各の塑像羅列す某像は某地を表し某塑は某境を章す千八百七十年普佛の役佛軍敗績し巴里城下の誓を爲しアルサス、ローレンの腴土豐壤普國に奪はれしより以降佛人二州を表章するストラスブルグ及メッツの女像に服するに緇服を以てし以て永く戰敗を記念せしむ然るに今や



巴里の戰捷氣味